

高崎市文化財調査報告書第418集

中泉十王堂遺跡3

宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2018

高崎市教育委員会
有限会社橋地所
技研コンサル株式会社

高崎市文化財調査報告書第418集

中泉十王堂遺跡3

宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2018

高崎市教育委員会
有限会社橋地所
技研コンサル株式会社

例 言

1. 本書は宅地造成工事に伴う「中泉十王堂遺跡3」（市遺跡調査番号742）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査から報告書刊行に至るまでの一連の作業は、有限会社橘地所の費用負担によって実施された。記して感謝の意を申し上げます。
3. 本調査および整理作業は高崎市教育委員会文化財保護課の指導のもと、技研コンサル株式会社が実施した。
4. 発掘調査および整理作業の体制は下記のとおりである。



遺跡所在地	群馬県高崎市中泉町字十王堂 99 番地 1
監理指導	高崎市教育委員会
調査担当	中村岳彦（技研コンサル株式会社）
発掘調査期間	平成 30 年 4 月 18 日～5 月 22 日
整理作業期間	平成 30 年 5 月 28 日～8 月 30 日
調査面積	182.95 m ²
発掘調査参加者	曾根裕 秋山修 新井實 榎原義久 遠藤好則 加藤知恵子 鴨田榮作 北爪二郎 桑原襄 今野妙子 設樂和男 田部井美砂子 山口直子
整理作業参加者	大川明子 福島祿子 安藤三枝子 岡田萌 河本ちさと 杉田友香 田所順子 南雲富子 細野竹美

5. 本書の編集は中村が行い、執筆は I を矢島が、他を中村が行った。
6. 発掘調査で出土した遺物および図面等の資料は、一括して高崎市教育委員会で保管されている。
7. 発掘調査および報告書の作成にあたり下記の諸氏及び機関に有益な御指導、御協力を賜った。記して謝意を表します（順不同、敬称略）

永井智教 西川制 能登健 日沖剛史 山本杏子 山下工業株式会社

凡 例

1. 全体図および遺構平面図に示した方位は北に座標北を表し、座標については世界測地系に基づく平面直角座標第Ⅸ系を使用している。本文および図中では下三桁を表記している。
2. 挿図に国土地理院発行 1/25,000『前橋』『下室田』、高崎市発行 1/2,500 都市計画図を使用した。
3. 土層および遺物の色調は『新版標準土色帖』（農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修）に拠る。
4. 掲載図面の縮尺は、全体図は 1/120、遺構図は 1/60・1/80 とし、図中にスケールを示した。
5. 遺物実測図及び拓影図の縮尺は土器は 1/4、石器は 1/1 を基本とし、図中にスケールを示した。
6. 本文および表中の計測値については [] は現存値を、() は復元値を表す。
7. 遺物写真図版は 1/3 に近づけるように撮影を行い、それ以外のものについては右下に () で示した。
8. 遺物実測図、遺構図のトーン表現は以下のとおりである。

構築面（基本層序 V 層以下）  須恵器断面 

9. 主な火山灰等の略称と年代は次のとおりである。

As-A（浅間 A 軽石：1783 年）、As-B（浅間 B 軽石：1108 年）、As-C（浅間 C 軽石：4 世紀初頭）、
Hr-FA（榛名二ツ岳渋川テフラ：6 世紀初頭）

目 次

例言・凡例		(3) 方形竪穴状遺構	11
I 調査に至る経緯	1	(4) 土坑	12
II 調査の方法と経過	1	(5) ピット	12
III 遺跡の立地と環境	2	(6) 倒木痕	15
1 地理的環境	2	(7) 遺構外出土遺物	16
2 歴史的環境	3		
IV 基本層序	6	VI 発掘調査の成果と課題	17
V 検出された遺構と遺物	7	1 古墳時代前～中期の畠と樹木	18
1 調査概要	7	2 古代の用水路	19
2 遺構・遺物	7		
(1) 溝	7	写真図版	
(2) 畠	11	報告書抄録	

挿図目次

第1図 調査区位置図	2	第10図 1号土坑	14
第2図 周辺遺跡図	3	第11図 1～13号ピット	15
第3図 調査区全体図	5	第12図 1号倒木痕	15
第4図 基本層序とトレンチの位置	6	第13図 出土遺物	16
第5図 1・2・4～6号溝	9	第14図 1号畠の残存状態	17
第6図 3号溝	10	第15図 1号土坑と根系の相関関係	18
第7図 1・2号畠(調査区南部)	12	第16図 Hr-FA 降下後における溝の変遷	19
第8図 1・2号畠(調査区北部)	13	第17図 3号溝の流路想定	20
第9図 1号方形竪穴状遺構	13		

表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表	4	第3表 周辺遺跡における畠の畝幅と植物珪酸体比較(古墳時代)	17
第2表 出土遺物観察表	16		

写真図版目次

PL.1 調査区全景 奥に榛名山(南東から) 調査区全景(北から)		PL.3 6号溝 完掘状況(北東から) 1・2号畠 完掘状況(北から) 1・2号畠 完掘状況(北西から) 1号土坑 完掘状況(北から) 1号方形竪穴状遺構 土層断面(北から) 1号方形竪穴状遺構 完掘状況(北西から) 7号ピット 土層断面(南から) 8号ピット 土層断面(東から)
PL.2 1号溝 完掘状況(東から) 2号溝 完掘状況(南東から) 3号溝 完掘状況(北東から) 3号溝掘削痕 完掘状況(北東から) 3号溝 土師器坏(12図9) 出土状況(北東から) 3号溝 土師器坏(12図15) 出土状況(北東から) 4号溝 完掘状況(東から) 5号溝 完掘状況(東から)		PL.4 13号ピット 検出状況(東から) 発掘調査風景(北東から) 出土遺物

I 調査に至る経緯

平成30年3月、土地所有者染谷薫氏と工事施工業者有限会社橘地所から、高崎市中泉町において計画している宅地分譲用地の開発に先立つ埋蔵文化財の照会が市教育委員会文化財保護課（以下、市教委と略）にあった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である中泉十王堂遺跡に隣接し、工事に際しては協議が必要である旨を回答した。開発計画が具体化した同年2月19日には、市教委へ埋蔵文化財試掘（確認）調査依頼書と文化財保護法に基づく届出が提出され、同年3月7日に試掘（確認）調査を実施した。その結果、古墳時代の畠跡等の遺構が検出され、埋蔵文化財の所在が明らかになった。この結果をもとに開発者と市教委で協議したが、現状保存は困難との結論に達し、発掘調査による記録保存の措置を講ずることで合意した。なお遺跡名については「中泉十王堂遺跡3」とした。

発掘調査は「群馬県内の記録保存を目的とする埋蔵文化財の発掘調査における民間調査組織導入事務取扱要項」に順じ、平成30年4月18日に有限会社橘地所と民間調査機関技研コンサル株式会社との間で契約を締結、また同日に有限会社橘地所・技研コンサル株式会社・市教委での三者協定も締結し、調査の実施にあたって市教委が指導・監督をすることとなった。

II 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、試掘調査の結果に基づき、道路部分を対象に行った。調査面積は182.95㎡である。座標は、世界測地系に基づく平面直角座標第Ⅸ系を使用している。

発掘調査は、平成30年4月18日から開始し、初日は重機搬入路の確認や近隣住民への挨拶回りを行った。19～24日にかけて、測量基準点の設置や調査区の設定などの準備を行い、雨天を挟んで26日に表土除去を行った。表土除去は0.25㎡級バックホウを使用し、調査区の北側から南側へと順次展開した。表土除去はまず、バックホウでAs-C混入黒色土層に相当する基本層序Ⅳ層まで行き遺構確認に努めたが、Ⅳ層の堆積はまだらで、Ⅱ層土の耕作痕による攪乱が著しく、また周辺遺跡の調査記録からⅣ層土を覆土とする畠の存在が予想されたことから、人力でⅣ層土を5～10cm程度一律に掘り下げ、最終的に淡色黒ボク土との漸移層であるⅤ層上面を遺構確認面とした。27日には遺構確認を終え、28日から遺構調査を開始した。基本的には、遺構掘り下げ→セクション図化・写真→遺物出土状況図化・写真→完掘状況写真の手順で調査を行った。5月14日には全景写真撮影を行い、15日には終了確認が市教委により行われた。終了確認後、確認面としたⅤ層以下の遺構と遺物の有無を確認するため、調査区中央に2本のトレンチを設定し、総社砂層の漸移層に相当するⅦ層まで掘り下げたが遺構は確認できなかった。また、総社砂層に相当するⅧ層以下の基本層序を確認するため、調査区中央に1.5m四方の深掘りを行った。18日にはトレンチ調査を終了し、21～22日にかけて機材の搬出を行い、現地調査を終了した。測量は、電子平板を用いて平面図・断面図の測量・編集を行い、オルソフォトによる写真測量も併用した。遺構写真の記録には、35mm判モノクロ・リバーサルフィルム（CanonEOS55・EF28-105mm/PRESTO・ISO400/PROVIA・ISO400）とデジタルカメラ（CanonEOS50D・EFS18-135mm）を用いた。

整理事業は平成30年5月28日から開始した。土器の実測における断面形の計測と外面調整の描画には3Dスキャナ型三次元測定機（KEYENCE VL-300series）を活用した。なお土器の断面形に関して本書では、器壁の荒れがひどく器形の特徴を捉え切れなかった1点の土器を除き、観察による点検を経た上でほぼそのままにスキャナのデジタルデータを掲載している。遺物写真の記録にはデジタルカメラ（CanonEOS 5D・EF200mmL）を用いた。遺構図に関してはデジタルによる修正・編集作業を行い、報告書の編集に際してはDTPの手法を用いた。8月30日に報告書を刊行し、全ての作業を終了した。

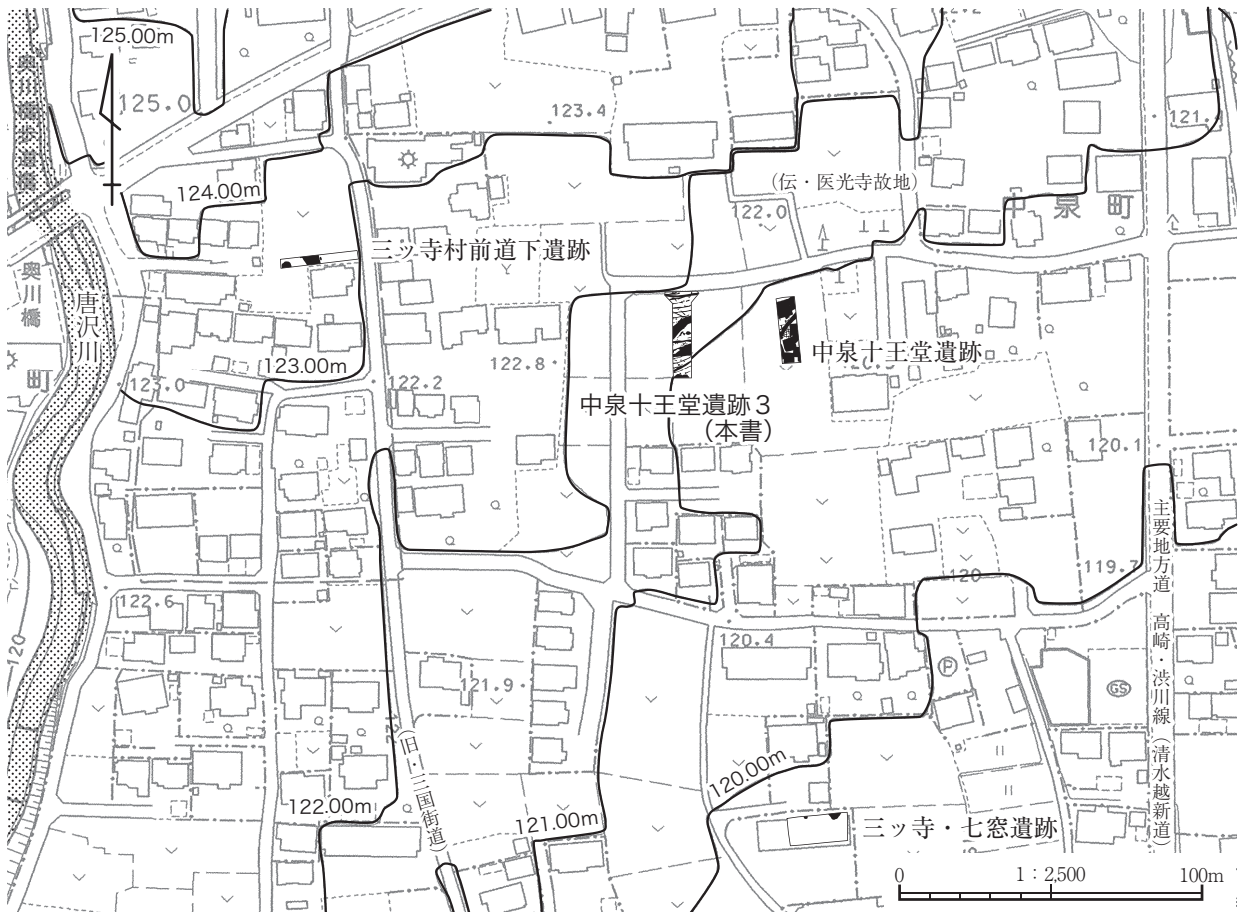
Ⅲ 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

中泉十王堂遺跡3は、高崎市中泉町字十王堂99番地1に所在する。2006年に高崎市へ編入する以前は群馬郡群馬町に属していた。遺跡の150m東には、高崎と渋川の市街地を結ぶ主要地方道である高崎・渋川線（県道25号線）が南北に直通する。その道端には古くから小売店が軒を連ね、町並みが大型店舗やチェーン店に移り変わった今も活況を呈する。ゆえに遺跡周辺は市街化しているが、大通りを一步裏へ入ると、そこには宅地と畑地が閑静な景観を留める。ごく最近、前橋と富岡を結ぶ予定の西毛広域幹線道路がこの大通りに接続し、これまでの南北の往来に加えて東西の利便性も増し、宅地や畑地の一角には、再び新興の住宅地が増えつつある。

本遺跡は、榛名山の山麓扇状地である相馬ヶ原扇状地の扇端部に立地する。相馬ヶ原扇状地の形成は、約1.7万年前に榛名山の山崩れで生じた陣場岩屑なだれを契機に始まる。その扇頂部に端を発して表層を流れる唐沢川や染谷川などの中小河川は、形成の過程で何度も大規模な洪水を起こし、地表を削り、谷を埋め、流れを変えては再び侵食と堆積を繰り返すことによって、縄文時代前期頃までには総社砂層と呼ばれる硬質の砂層を一帯に厚く堆積させ（早田1990）、その厚さは本遺跡でも2.2m以上に達する。これらの中小河川は、その後の歴史時代でも、榛名山や浅間山の噴火による火山灰や軽石などテフラ（火山碎屑物）の堆積を契機に氾濫し、一帯に泥流や土石流を起こして、それぞれの時代に生きた人々の営為を翻弄してきたのだが、一方でこれらの堆積物は、遺跡として残りにくい田畠の痕跡までもを地表下に留め、昔の人々の生業を現在の我々に垣間見せてくれる。

また、このような暴れ川であった唐沢川や染谷川、扇央部を水源とする天王川に加えて、「井出」「中泉」「水窪」「冷水」などの地名に残る扇端部湧水点の水利に頼らざるをえないこの土地は、潜在的な貧水地帯であり、このことは本遺跡の形成にも少なからぬ影響を与えていると考えることができる。



第1図 調査区位置図

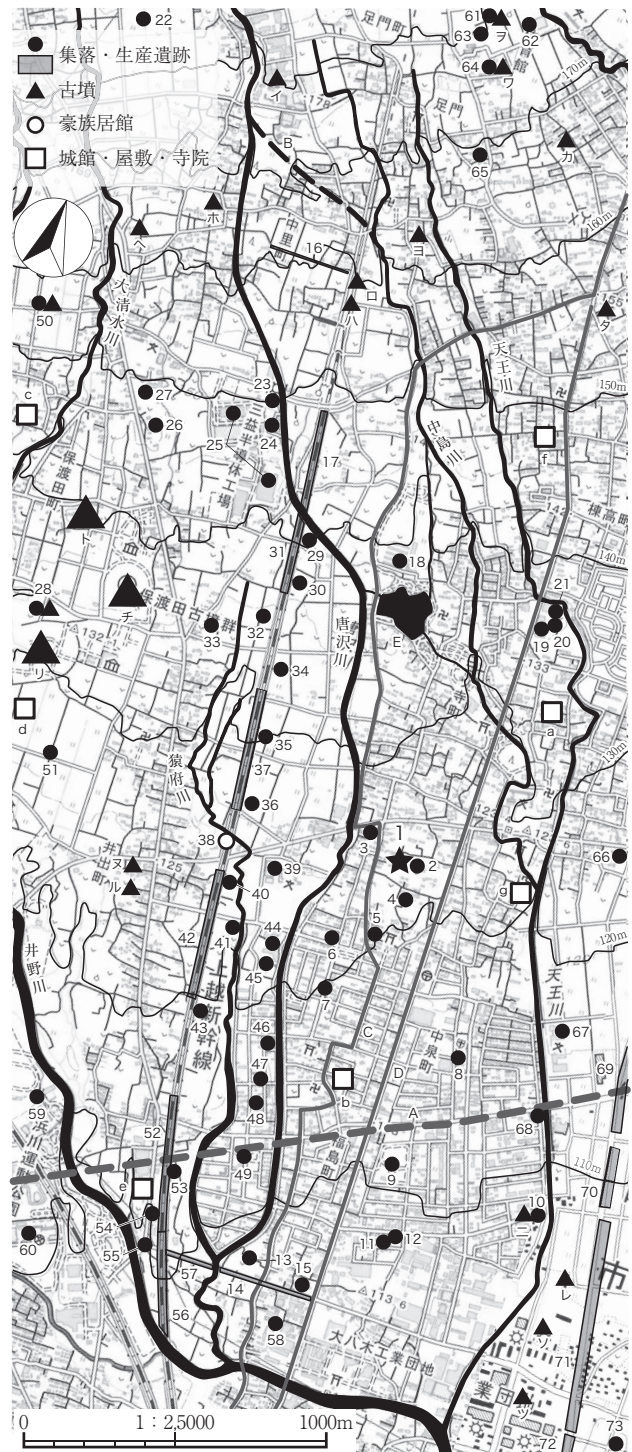
2 歴史的環境

本遺跡は、唐沢川と天王川に隔たれた南北に細長い微高地に立地する。唐沢川より西は、本遺跡周辺と対照的な水田地帯であり、大型前方後円墳である保渡田古墳群（ト～リ）や豪族居館の三ッ寺I遺跡（38）に、ある段階の結実をみる水利社会の展開過程には、若狭徹氏をはじめ（若狭 2007 など）厚い研究史がある。また天王川より東は、本遺跡周辺に似た貧水地帯だが、奈良時代に上野国府や国分寺の隣接地域になることで、当地とは異なる地域史的展開がみえる。そこで本節では、この唐沢川と天王川で画される小地域の遺跡を概観する。

先述のように、縄文時代前期頃まで扇状地の堆積作用が強く影響した本遺跡周辺では、旧石器時代の遺跡は、わずかな遺物の出土を除いて、ほとんど確認されていない。縄文時代前期以降も扇状地は不安定な環境だったのか、権現原II遺跡（7）などで中期の小規模な集落が調査された程度である。本遺跡や三ッ寺・七窓遺跡（4）には倒木痕があり、転倒時に巨大な根鉢を形成するブナ類やカシ類のような、浅根集中型の根系をもつ大木（荻住 1979）が林立していたのかもしれない。

弥生時代中期後半になると、南部の雨壺遺跡（14）や大八木・伊勢廻遺跡2（15）に遺跡が分布し、後期に続く。扇端部湧水を水源とする猿府川下流域の両岸では、西浦北遺跡、雨壺遺跡、大八木熊野堂遺跡とその周辺（14・15・47～49・52・53・56・57）で、後期の住居跡と水田と方形周溝墓が一体的に分布し、湧水の小さな谷を農業基盤とした営みが見える。同じ傾向は天王川下流域の諸口遺跡（10）や小八木志志貝戸遺跡（71）にもいえる。

古墳時代前期になると、猿府川下流域の遺跡は南端に集約し、大八木熊野堂II遺跡（56）に前方後方形周溝墓を造営するが中期に継続せず、天王川下流域でも同様である。該期はAs-Cの火山災害に直面しており、その事態が遺跡の分布を変化させる一要因となった可能性はある。本遺跡1号畠や中泉十王堂遺跡（2）の住居跡群は該期の終わりに営まれ、災害は収束していただろうが、やはり現状では中期に継続しない。該期の遺跡は保渡田VII遺跡（28）など唐沢川以西の小地域に多く、やがて保渡田古墳群や三ッ寺I遺跡が中期後半に成立する。その農業基盤として、本来は中島川を介して天王川へ流れた唐沢川（B）を、現在の流路へ付け替えた可能性が保渡田遺跡（17）や保渡田東遺跡（25）の調査や旧地形のボーリング調査から指摘されている（能登 1990）。中道遺跡（16）のボーリング調査では該当する旧地形は確認されないが、仮に付け替えを推定すると、本遺跡の小地域が南北に細長い貧水地帯として認識できる背景には、人為的な要因が深く影響する可能性もある。このような経過もあってか



第2図 周辺遺跡図

中期の遺跡は少なく、権現原 I 遺跡（6）や大八木箱田池遺跡（11）に小規模な集落が確認できる程度である。一方、三ッ寺大下遺跡（44・45）や井出村東遺跡（42）など、猿府川中流域両岸に集落が増え、この現象は、湧水から唐沢川を介した河川灌漑へと更新された猿府川の、新たな用水網を基盤とする可能性もある。中期の終わりに今度は Hr-FA の火山災害に直面し、保渡田古墳群周辺の水田地帯は泥流による大きな被害を被る。以後、大型前方後円墳は造られないが、中林遺跡（39）や三ッ寺Ⅲ遺跡（31）など集落は継続し、その復興は早い。本遺跡の小地域はより高燥で泥流の影響は少ないのか、遺跡の分布は細々と続き、前代より標高が高い中島川の開析谷に面する一帯に、堤上遺跡（18）や棟高南八幡街道遺跡（19）や保渡田遺跡が新たに営まれる。これらは平安時代まで継続し、中でも花形杏葉が出土した堤上遺跡は、この小地域で質量共に卓越した規模にある。7世紀になると、さらに標高の高い地帯に足門村西古墳群（イ）や毘沙門古墳群（ロ・ハ）などの群集墳が造営される。

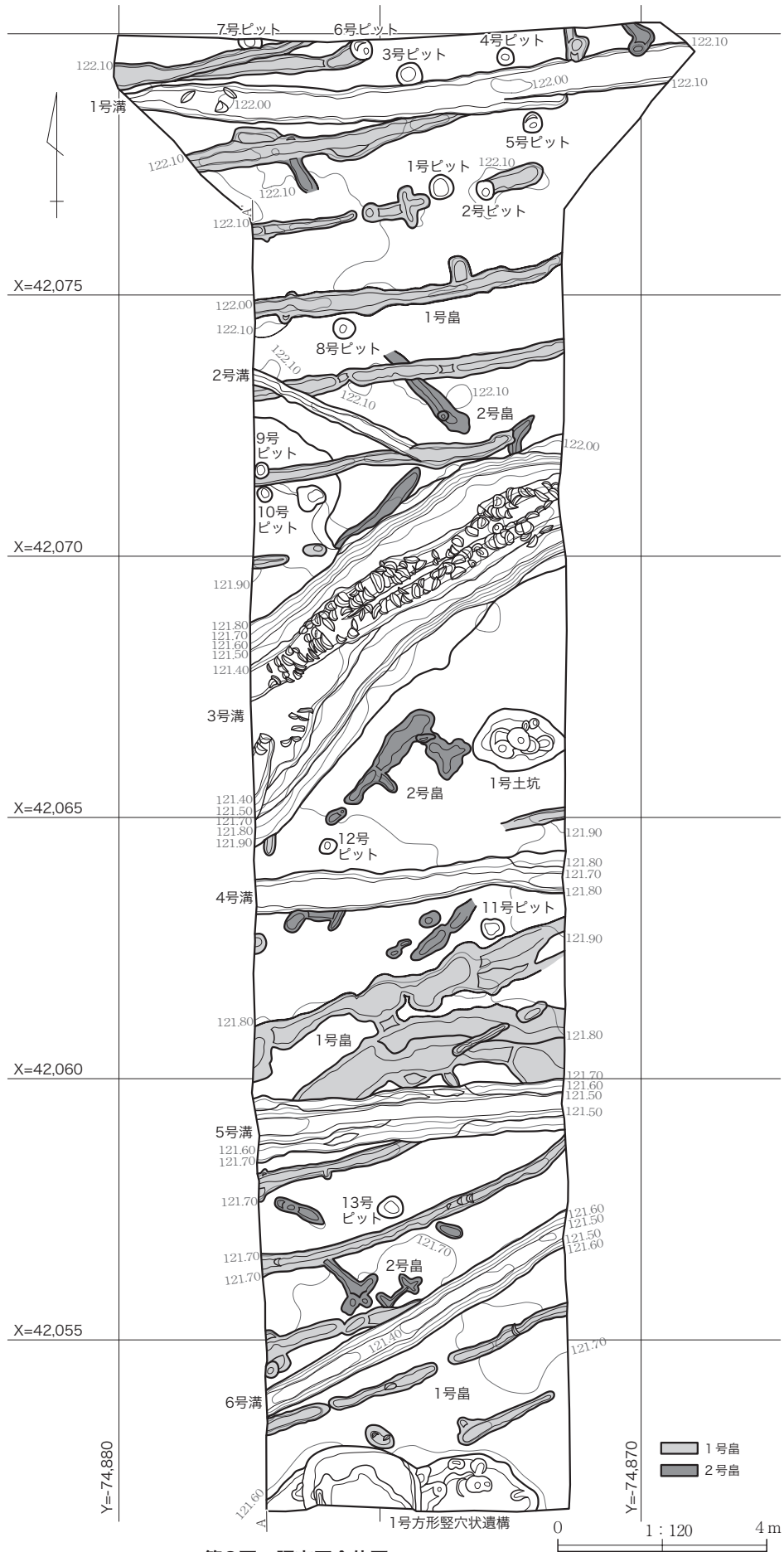
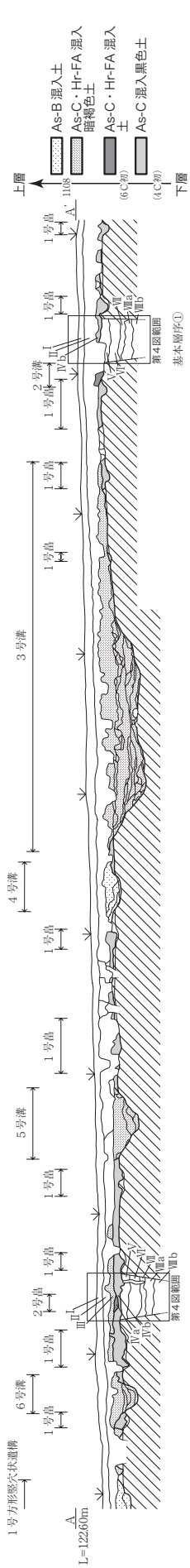
中島川の開析谷に面する遺跡は、奈良～平安時代に規模を広げ、棟高南八幡街道遺跡 3（21）には大型の住居跡や掘立柱建物跡が建つ。また、堤上遺跡では帯金具や八棧鏡や中空円面硯などが出土し、前代に続きこの小地域で卓越した内容をもつ。これら拠点的な遺跡群の南方で扇状地の下方にある、本遺跡 3号溝や三ッ寺村前道下遺跡（3）2号溝は該期の用水路と判断でき、微高地を南に流れる。その先の低地部では、中泉遺跡（8）や福島遺跡（9）に水田跡が分布するが、1108年に今度は As-B の火山災害で埋没する。そのような影響もあってか、堤上遺跡を中心とした遺跡群はその後に継続しない。また、本遺跡の溝跡は、平安時代後期頃に掘削方向が東西に統一され、この頃、土地区画に変更があった可能性がある。なお、江戸時代に整備された三国街道（C）は本遺跡の西側を南北に通過するが、南方の雨壺遺跡ではその路線脇で As-B 以前の道路状遺構が調査されており、この小地域の南端部を東西に走る推定東山道国府ルート（A）との関連が問われる。

宝徳 2 年（1450 年）には、本遺跡北側に医光寺の創建が伝わるが、戦国期に混乱を避け、現在の寺地（g）へ集落ごと移転したと言われており、本遺跡でこれに関連する遺構や遺物は確認できなかった。慶安 2 年（1649 年）、高崎藩主安藤重長は、中島川の開析谷に唐沢川と中島川から引水し、三ッ寺・棟高・中泉の用水溜井として三ッ寺堤（E）を築いた。しかしその後も当地は貧水地帯であり、周辺の村々を巻き込んだ唐沢川や三ッ寺堤の用水権をめぐる水争いは、近代にいたるまで幾度となく生じている。

第 1 表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代・主な遺構・遺物
1	中泉十王堂遺跡 3	古墳（前）：鳥、飛鳥～奈良：用水路
2	中泉十王堂遺跡	古墳（前）：住居跡・高、中世以降：井戸
3	三ッ寺村前道下遺跡	奈良・平安：用水路・鳥・壑穴状遺構
4	三ッ寺・七窓遺跡	古墳（中）：壑穴状遺構
5	中泉稲荷前遺跡	平安：住居跡
6	権現原 I 遺跡	古墳（中）：住居跡・高、古墳（後）：住居跡、奈良・平安：住居跡、中世以降：地下式坑、井戸・土坑墓 ◇高盤・切子玉・鉄製紡錘車・鉄鏡・刀子・羽口
7	権現原 II 遺跡	縄文（中）：住居跡、古墳（中）：高、古墳（後）：奈良・平安：住居跡、中世：井戸・土坑墓 ◇石製紡錘車・墨書土器（判読不能）
8	中泉遺跡	平安：水田
9	福島遺跡	平安：水田
10	諸口遺跡	弥生（後）～古墳（前）：住居跡
11	大八木箱田池遺跡	縄文（中）・古墳（中）：住居跡、奈良・平安：住居跡、用水路
12	大八木箱田池遺跡 II	縄文（中～後）：埋蔵・袋状土坑、古墳（前～後）：住居跡、奈良・平安：住居跡、用水路 ◇石製紡錘車・勾玉
13	福島富士腰南遺跡	弥生（後）：方形周溝墓、平安：住居跡
14	雨壺遺跡	縄文（中～後）・弥生（中）～古墳（前）：住居跡、奈良・平安：住居跡、欄柱式掘立柱建物跡、道路状遺構
15	大八木・伊勢淵遺跡 2	弥生（中～後）：住居跡、掘立柱建物跡、古墳（前）：住居跡、平安：住居跡、掘立柱建物跡
16	中道遺跡	※唐沢川旧河道確認ボーリング調査。遺構なし。
17	保渡田遺跡	古墳（後）：住居跡、飛鳥：住居跡・石組カマド、奈良～平安：住居跡 ◇暗文環・盤・大甕・長頭瓶・横瓶・陶白・紡錘車・白玉
18	堤上遺跡	古墳（後）～奈良：住居跡、欄柱式掘立柱建物跡、内形周溝状遺構、井戸、平安：住居跡・鳥 ◇中空円面硯・灰輪・暗文環・盤・高盤・長頭瓶・横瓶・陶白・灯明具・羽口・土鐘・紡錘車・勾玉・白玉・八棧鏡・馬具（花形杏葉・引手）・弓筈 ◇鉄鏡・鉄斧・鉄鎌・刀子・帯金具（蛇尾）・耳環
19	棟高南八幡街道遺跡	古墳（後）～奈良：住居跡 ◇暗文環・盤
20	棟高南八幡街道遺跡 2	飛鳥～平安：住居跡、中世：欄柱式掘立柱建物跡
21	棟高南八幡街道遺跡 3	飛鳥：住居跡、奈良：住居跡、欄柱式掘立柱建物跡、平安：住居跡、鍛冶炉
イ	足門村西古墳群	飛鳥～奈良：円墳 15 基 7 世紀後半～8 世紀初頭 ◇大甕・長頭瓶・鉄鏡
ロ	中里天神塚古墳	古墳（後）：円墳 7 世紀 ◇刀・鉄鏡・鉄釘・刀子・耳環
ハ	毘沙門古墳群	古墳（後）：【1号墳】円墳 7 世紀前半 ◇耳環 【2号墳】円墳 7 世紀初頭 ◇勾玉・丸玉・刀・馬具・鉄斧・鉄鏡・耳環
ニ	諸口古墳群	古墳（後）：【1号墳】円墳 6 世紀前半 【2号墳】円墳 6 世紀後半 ◇刀・槍鏑・鉄鏡・刀子・耳環 【3号墳】円墳 6 世紀後半 ◇刀・刀装具（鐙）・馬具（引手・飾金具）・鉄鏡・耳環

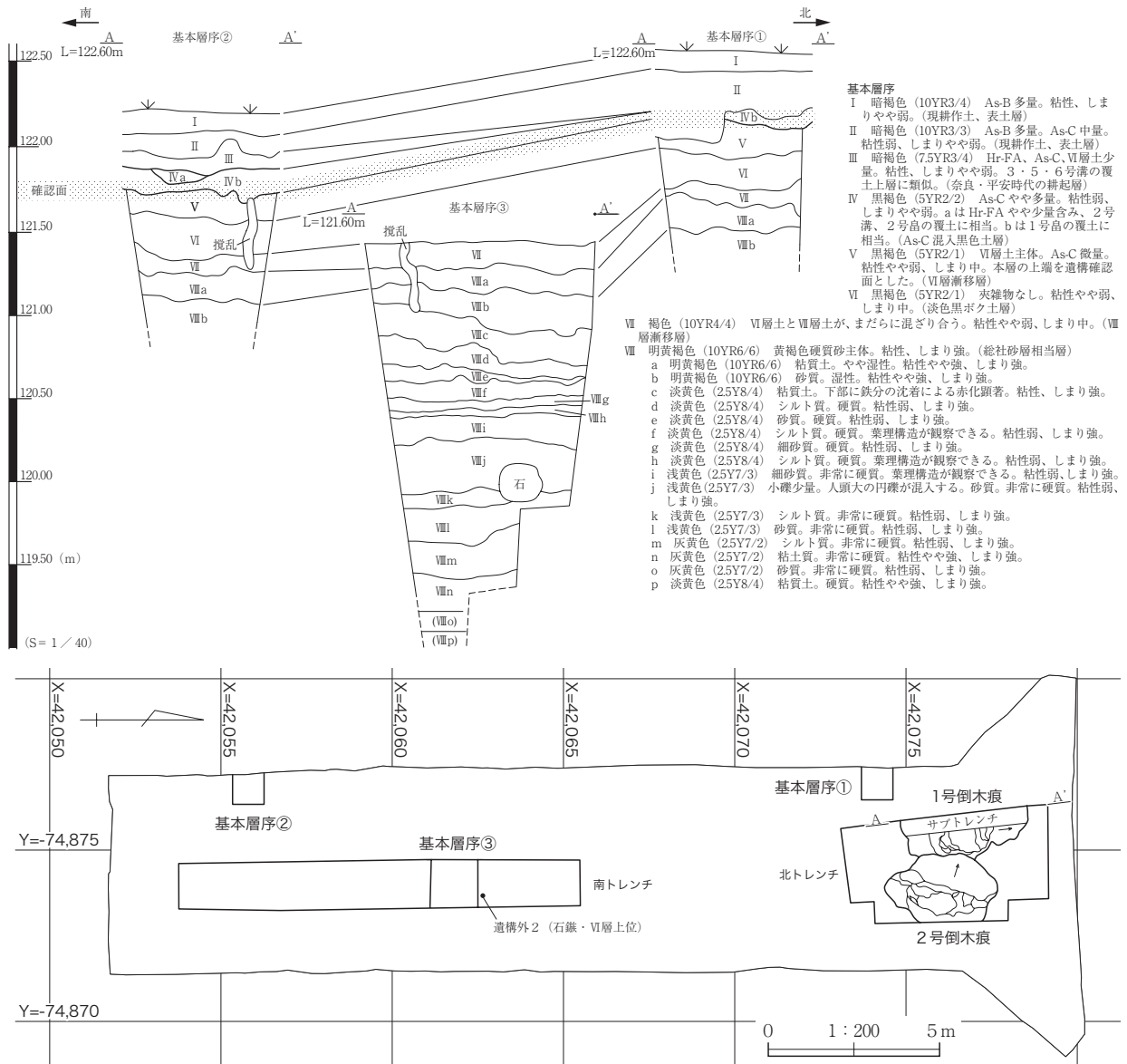
番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
22	保渡田 II 遺跡	36	桁街道 II 遺跡	50	保渡田・荒神前遺跡	64	蓋遺跡	リ	井出二子山古墳	d	花輪寺館跡
23	中里前遺跡	37	三ッ寺 II 遺跡	51	井出地区遺跡群 A 区水田遺跡	65	足門東屋敷間遺跡	ス	賢海坊古墳	e	熊野堂館跡
24	保渡田中里前遺跡	38	三ッ寺 I 遺跡	52	大八木熊野堂 I 遺跡	66	棟高東弥三郎街道遺跡	ル	御庫山古墳	f	平石館跡
25	保渡田東遺跡	39	中林遺跡	53	東下井出 II 遺跡	67	棟高西石田遺跡	ヲ	寺屋敷古墳群	g	医光寺
26	保渡田徳昌寺前遺跡	40	村東 II 遺跡	54	西下井出 II 遺跡	68	福島飛地遺跡	ワ	蓋古墳群	A	推定東山道国府ルート
27	保渡田徳昌寺前 II 遺跡	41	三ッ寺・猿府遺跡	55	熊野堂遺跡	69	菅谷石塚遺跡	カ	鶴巻古墳群	B	推定唐沢川旧流路
28	保渡田 V 遺跡	42	井出村東遺跡	56	大八木熊野堂 II 遺跡	70	正観寺西原遺跡	ヨ	薬師堂古墳	C	三国街道
29	棟高南八幡街道遺跡	43	東下井出遺跡	57	熊野堂遺跡第 III 地区	71	小八木志志貝戸遺跡	タ	観音寺古墳	D	清水越新道
30	棟高南八幡街道遺跡	44	三ッ寺大下 II 遺跡	58	大八木伊勢淵遺跡	72	小八木遺跡	レ	オウカ山古墳	E	三ッ寺堤
31	三ッ寺 III 遺跡	45	三ッ寺大下 I 遺跡	59	御布川遺跡	73	小八木 I・II 遺跡	ソ	三本山古墳		
32	井出地区遺跡群 B 区	46	西浦北 II 遺跡	60	芦田貝戸 II 遺跡	ホ	辰野古墳群	ツ	トミツカ古墳		
33	上井出遺跡	47	西浦北 I 遺跡	61	寺屋敷 I 遺跡	ヘ	浅間塚古墳	ア	棟高館跡		
34	西原道南遺跡	48	西浦北遺跡	62	寺屋敷 II 遺跡	ト	保渡田薬師塚古墳	バ	中泉磐跡		
35	八幡街道遺跡	49	西浦南遺跡	63	寺屋敷 III 遺跡	チ	保渡田八幡塚古墳	ク	保渡田城跡		



第3図 調査区全体図

IV 基本層序

基本層序は、調査区西壁の北部と南部、調査区中央の3地点で観察した(4図)。Ⅲ層はAs-Bを含まず、以下の層序の粒子やブロックが攪拌された状態で含まれ、古代の溝の覆土上層に類似することから、古代の耕起層と判断できる。表土層のⅠ・Ⅱ層による削平を免れた調査区南部で部分的に分布する。Ⅳb層はいわゆる「C黒」と通称されるAs-C混入黒色土層で、ほぼ全域に分布する。直下で確認できる1号畠は、この土を畝間溝の覆土とし、「C黒」との分離は困難である。また、古墳時代後期以降の調査は通常この層位を遺構確認面とするが、今回の調査では隣接地点の調査成果からⅣ層を覆土とする遺構の存在が予測されたため、この直下でⅥ層との漸移層であるⅤ層上面を遺構確認面とした。遺構確認面の傾斜は南へ緩やかに下る。Ⅵ層は淡色黒ボク土に相当すると判断できる。ごく少量の縄文土器片や石器を包含する。Ⅶ層はⅧ層への漸移層で、下位ほど黄褐色砂質土を多く含み黄色味を増す。古墳時代以前の遺構の有無を確認するために掘削した南北2本のトレンチは、この層位を遺構確認面とした。Ⅷ層は黄褐色の硬質な砂質土で、粘質・シルト質・砂質の細分層が互層を成し、層によっては葉理構造が発達したり、人頭大の円礫が混入する。堆積が厚く、以下の層序は確認できなかったが、周辺遺跡での地質の分析から、この層は総社砂層に相当すると判断できる。表土下3.0mに達するⅧp層で、土中の湿気が滲み出す程度のわずかな湧水を確認した。



V 検出された遺構と遺物

1 調査概要

中泉十王堂遺跡3（以下、「本遺跡」）は、中泉十王堂遺跡（以下、「一次調査」）の西側約30mに隣接する。これら2つの調査地点は同一遺跡の別地点と判断でき、各時代の溝やAs-C混入黒色土を畝間溝の覆土とする畠は、連続性をもって分布している。しかし一方で、一次調査で確認された古墳時代前期の竪穴住居跡群は分布していない。

本遺跡では、弥生時代以前の倒木痕2箇所、古墳時代の溝2条、畠2箇所、土坑1基、ピット13基、飛鳥～平安時代の溝2条、方形竪穴状遺構1基、中世以降の溝2条を調査した。遺物は、3号溝から土師器や須恵器がある程度まとまって出土したが、分布する遺構の性格もあってか全体的に希薄で細片が多く、出土量は遺物収納箱に2箱程度である。しかしながら、現地表では比較的多くの土器片が表採できることを考えると、現代の耕作によって深度の浅い遺構は煙滅している可能性もあるだろう。

2 遺構・遺物

(1) 溝

1号溝（第5図、PL. 2） 位置 調査区北端部。（X = 42,079、Y = - 74,869 ~ - 74,880） 重複 1・2号畠、3号ピットより新しい。 走向方位 N - 86° - E。 規模 検出長 [11.02] m、上幅0.35 ~ 0.75 m、下幅0.18 ~ 0.54 m、深さ0.10 m。底面の標高は東端で122.02 m、西端で122.05 m。 形状等 東西方向へ直線的に走向し、両端は調査区外。断面は緩い弧状。底面はほぼ平坦。覆土はAs-Bを含む。 出土遺物 覆土中から土師器坏やS字状口縁台付甕、縄文土器片などの細片が出土したが、本遺構に伴うと判断できる遺物は出土しなかった。 時期 堆積状況から中世以降と考える。

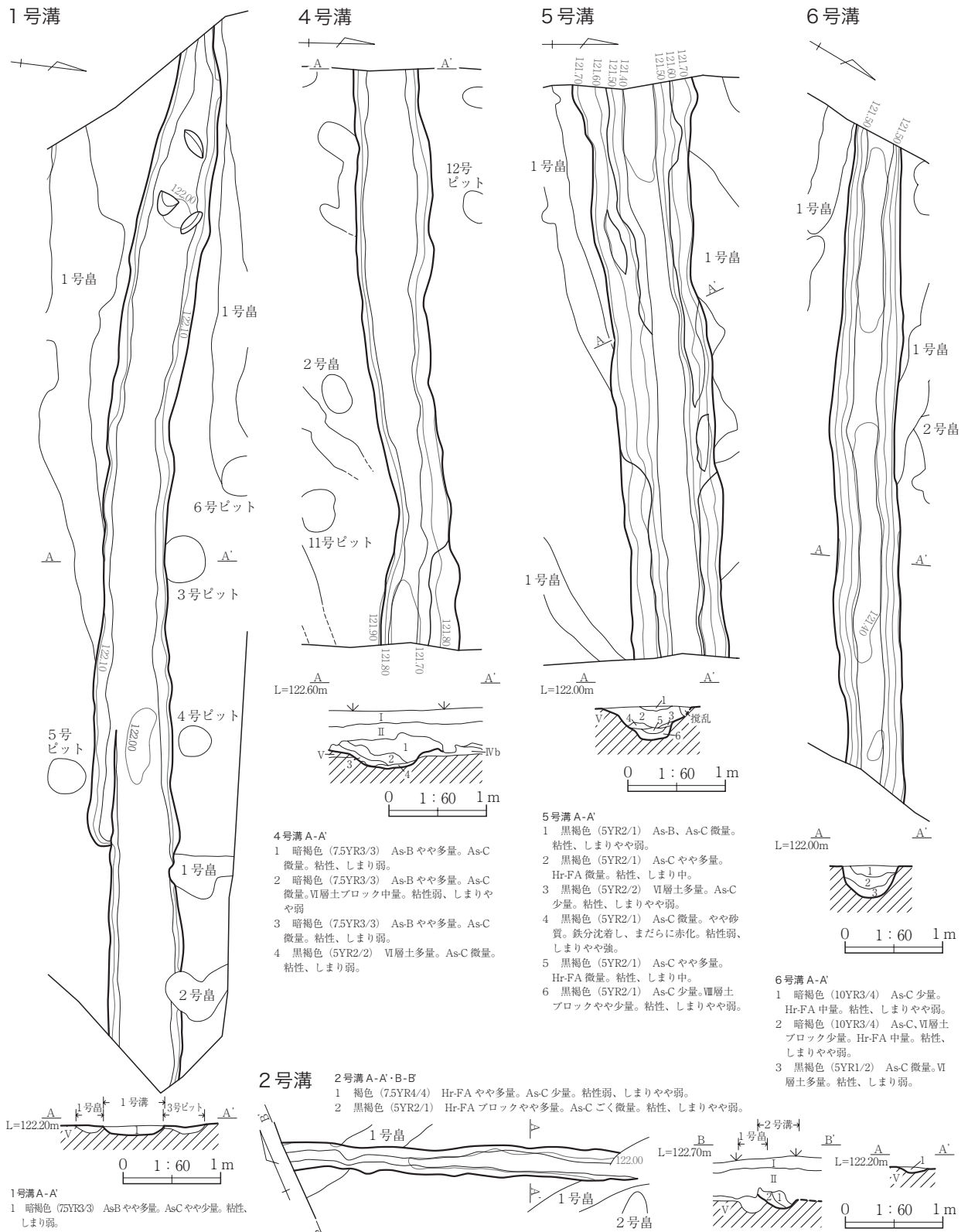
2号溝（第5図、PL. 2） 位置 調査区北部。（X = 42,072 ~ 42,074、Y = - 74,874 ~ - 74,877） 重複 1号畠より新しい。 走向方位 N - 66° - W。 規模 検出長 [3.64] m、上幅0.21 ~ 0.35 m、下幅0.05 ~ 0.19 m、深さ0.13 m。底面の標高は北西端で122.02 m、南東端で121.97 m。 形状等 北西～南東方向へ直線的に走向し、北西端は調査区外、南東端は徐々に浅くなり消失。断面は弧状。底面は南東端に向かってわずかに傾斜する。覆土はHr-FAやAs-Cを含む。 出土遺物 なし。 時期 堆積状況から古墳時代後期と考える。備考 覆土は2号畠に類似するが、走向方向と断面形状が異なるため、溝と判断した。

3号溝（第6・13図、PL. 2・4） 位置 調査区中央部。（X = 42,064 ~ 42,072、Y = - 74,871 ~ - 74,877） 重複 1・2号畠、9・10号ピットより新しい。 走向方位 N - 52° - E。 規模 検出長 [9.53] m、上幅2.36 ~ 2.77 m、中段幅2.23 ~ 2.36 m、下幅0.26 ~ 0.34 m（旧段階）・0.22 ~ 0.35 m（新段階）、深さ0.72 m（旧段階）・0.65 m（新段階）。底面の標高は北東端で121.35 m、南西端で121.23 m。 形状等 東から南西に向かって緩やかに曲がりながら走向し、両端は調査区外、断面は不整形なU字状。底面は南西端に向かってわずかに傾斜する。土層断面と底面の掘削痕列2条から再掘削を伴うと判断でき、新旧2段階に大別できる。旧段階は断面A-A'の19～28層、B-B'の18～28層が相当し、南壁際に沿って走向する。底面には規則的な掘削痕列が残るが、地点によっては、VI層とVIII層が粗く攪拌されて反転したかのような地山の土塊が、耕作痕の覆土となっており（B-B'の28層）、これは掘削時の残土が完全には排土されずに取り残されたためと判断できる。掘削痕列は南西部の調査区西壁際付近ではあまり観察できず、この部分は底面の形状が不規則に乱れている。旧段階の覆土はHr-FAやAs-Cを含みAs-Bは含まない。下層には砂の堆積が観察できた（A-A'の28層、B-B'の27層）。また、壁面の崩落と判断できる地山ブロック土の流入層が、南壁際に顕著に観察できた。以上の点から、旧段階の溝は流水による侵食と埋堆を受けていると判断できる。ただし、底面の傾斜度や掘削

痕の残存状態、堆砂層の状態から、流勢はさほど強くなかっただろう。新段階は、断面 A-A' の 1～18 層、B-B' の 5～17 層が相当し、旧段階の北側に重複して再掘削されている。掘削痕や覆土の状態は旧段階と同じで、緩やかな水の流れがあったと判断できるが、堆砂層は下層以外にも 2 面観察でき、数度の流水の影響を受けながら徐々に埋没したものと判断できる。また、北壁西寄りの上端はテラス状に浅く窪み、覆土は溝の上層と連続するが (B-B' の 6 層)、底面に硬化面などは観察できなかった。なお、最上層には B-B' の 2～4 層がブロック状に乱れて堆積しており、埋没がほぼ完了して窪地化した本跡の底面を耕起した痕跡と判断できる。出土遺物 溝跡としては多くの遺物が出土した。底面直上～下層と上層からの出土量が多く、細片が多いがある程度形を残す遺物も少量含む。S 字状口縁台付甕や内斜口縁環など、古墳時代前～中期の土器片を少量含むが、これらは細片で出土層位もまちまちであり、周囲に分布する遺構群からの流入と判断できる。量的な主体は、底面直上～下層では、いわゆる“北武蔵系”の範疇にある、小径化と稜部の退化が顕著ないわゆる“鬼高式”の模倣坏と、丸底で口縁部が稜をもたずに内屈するいわゆる“真間式”の坏にあり、上層では平底気味で口縁部の外傾が強くやや扁平な地産暗文坏、口径底径比が大きく高台が高い須恵器高台付坏にある。また全体的な器種組成に偏りがあり、供膳具が多く煮炊具が極めて少ない点は特徴といえる。第 13 図には、本跡に特徴的な遺物と残存率の高い遺物を図示した。12～16 は旧段階の底面直上から出土した。12 の高台付坏は口径底径比が小さく、低い高台が底部外縁の内側に貼付されている。13・14 はいわゆる“真間式”の坏で、13 は体部外面のヘラケズリが口縁部直下までおよび口縁部が鋭く内屈し古相を示すのに対して、14 は体部外面の上端に最終調整が施されず口縁部は緩く内屈し、本跡出土の同系統の坏では新相を示す。15・16 は模倣坏で、小径化と稜部の退化が顕著で同系統の坏では終末的な形態を示す。7・9 は旧段階の下層から出土した。7 は盤で口縁部と底部の境に稜をもつ。9 は体部外面の無調整範囲こそ限定的だが 14 と同型式と判断できる。8・10 は新段階の下層から出土した。8 は大型の甕で外面に焼成前のヘラ記号らしき線刻が観察できるが判然としない。完全な還元雰囲気では焼成されておらず表面は橙色を呈する。10 は 15・16 と同型式と判断できる。5・6・11 は中～下層で出土したが厳密な層位は記録していない。5 の坏蓋は小径化と稜の退化が顕著で陶器 TK217 型式の古段階に相当する。6 は 12 と同型式と判断できる。11 の有段口縁坏は有段部がわずかな沈線のみで表現されており、同系統の坏では終末的な形態を示す。1～4 は上層から出土した。1 の坏蓋は環状摘みをもつ。2 の高台付坏ないし碗は口径底径比が大きく体部は直線的に外傾し、底部外縁に断面三角状のやや高い高台が貼付されている。3 は大型の在地産暗文坏で体部は大きく外傾し体部と底部の屈曲点は不明瞭であり同系統の坏では新相を示す。4 の皿は丸底で口縁部と体部の境は不明瞭である。旧段階の底面直上～新段階の下層出土の遺物には組列上の連続性を認めることができるが、上層出土の遺物には若干の断続があるだろう。時期 堆積状況と出土遺物の層位・形態から飛鳥～平安時代、おおむね 7 世紀中葉～9 世紀後半の時間幅が推定でき、7 世紀後半～8 世紀初頭に機能のピークを推定できる。備考 底面の掘削痕と堆砂層の状態から用水路としての性格が推測できる。

4号溝 (第5図、PL. 2) 位置 調査区中央部。(X = 42,064, Y = - 74,871 ~ - 74,877) 重複 2号畠より新しい。走向方位 N - 86° - W。規模 検出長 [6.03] m、上幅 0.54 ~ 0.76 m、下幅 0.13 ~ 0.52 m、深さ 0.28 m。底面の標高は東端で 121.69 m、西端で 121.79 m。形状等 東西方向へ直線的に走向し、両端は調査区外。断面は緩い弧状。底面はほぼ平坦。覆土は As-B を含む。出土遺物 覆土中から土師器坏や甕、黒色土器碗、縄文土器片などの細片が出土したが、本遺構に伴うと判断できる遺物は出土しなかった。時期 堆積状況から中世以降と考える。

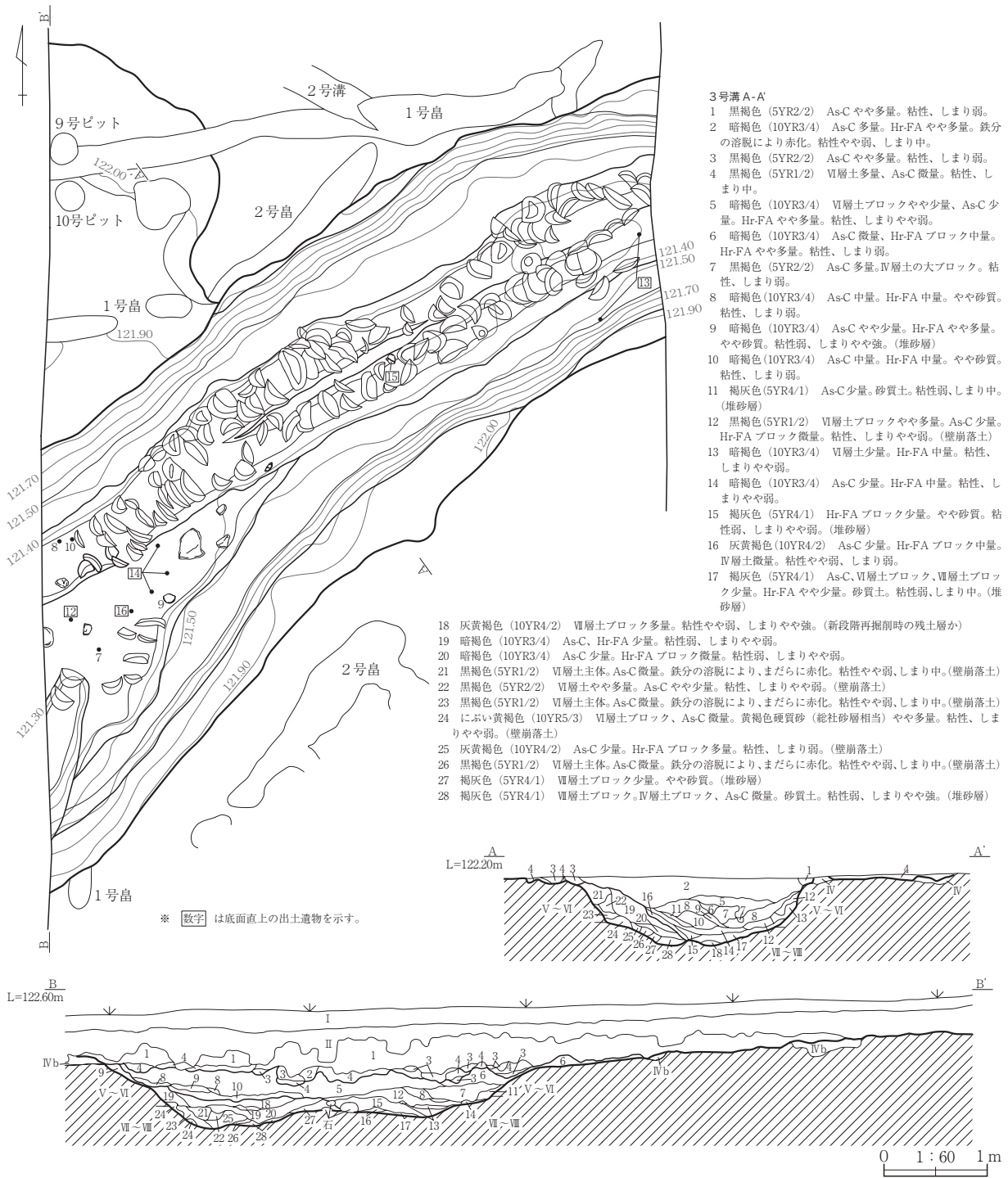
5号溝 (第5図、PL. 2) 位置 調査区南部。(X = 42,059, Y = - 74,871 ~ - 74,877) 重複 1号畠より新しい。走向方位 N - 86° - E。規模 検出長 [6.01] m、上幅 0.91 ~ 1.26 m、下幅 0.21 ~ 0.30 m、深さ 0.48 m。底面の標高は東端で 121.38 m、西端で 121.42 m。形状等 東西方向へ直線的に走向し、両端は調査区外。断面は逆台形状。底面はほぼ平坦。覆土は最上層に As-B を含む。以下の層には Hr-FA と As-C を含



第5図 1・2・4～6号溝

み As-B は含まない。出土遺物 覆土中から土師器と須恵器の坏や甕、縄文土器片などの細片が出土したが、本遺構に伴うと判断できる遺物は出土しなかった。時期 堆積状況から平安時代後期と考える。

6号溝 (第5図、PL. 3) 位置 調査区南部。(X = 42,053 ~ 42,058, Y = - 74,871 ~ - 74,877) 重複 1・2号畠より新しい。走向方位 N - 59° - E。規模 検出長 [6.96] m、上幅0.46 ~ 1.26 m、下幅0.18 ~ 0.28 m、深さ0.46 m。底面の標高は東端で121.39 m、西端で121.37 m。形状等 北東から南西方向へ直線の



- 3号溝 A-A'**
- 1 黒褐色 (5YR2/2) As-C やや多量。粘性、しまり弱。
 - 2 暗褐色 (10YR3/4) As-C 多量。Hr-FA やや多量。鉄分の溶脱により赤化。粘性やや弱、しまり中。
 - 3 黒褐色 (5YR2/2) As-C やや多量。粘性、しまり弱。
 - 4 黒褐色 (5YR1/2) VI層土多量、As-C 微量。粘性、しまり中。
 - 5 暗褐色 (10YR3/4) VI層土ブロックやや少量、As-C 少量。Hr-FA やや多量。粘性、しまりやや弱。
 - 6 暗褐色 (10YR3/4) As-C 微量、Hr-FA ブロック中量。Hr-FA やや多量。粘性、しまり弱。
 - 7 黒褐色 (5YR2/2) As-C 多量。IV層土の大ブロック。粘性、しまり弱。
 - 8 暗褐色 (10YR3/4) As-C 中量。Hr-FA 中量。やや砂質。粘性、しまり弱。
 - 9 暗褐色 (10YR3/4) As-C やや少量。Hr-FA やや多量。やや砂質。粘性弱、しまりやや強。(堆砂層)
 - 10 暗褐色 (10YR3/4) As-C 中量。Hr-FA 中量。やや砂質。粘性、しまり弱。
 - 11 褐灰色 (5YR4/1) As-C 少量。砂質土。粘性弱、しまり中。(堆砂層)
 - 12 黒褐色 (5YR1/2) VI層土ブロックやや多量。As-C 少量。Hr-FA ブロック微量。粘性、しまりやや弱。(壁崩落土)
 - 13 暗褐色 (10YR3/4) VI層土少量。Hr-FA 中量。粘性、しまりやや弱。
 - 14 暗褐色 (10YR3/4) As-C 少量。Hr-FA 中量。粘性、しまりやや弱。
 - 15 褐灰色 (5YR4/1) Hr-FA ブロック少量。やや砂質。粘性弱、しまりやや弱。(堆砂層)
 - 16 灰黄褐色 (10YR4/2) As-C 少量。Hr-FA ブロック中量。IV層土微量。粘性やや弱、しまり弱。
 - 17 褐灰色 (5YR4/1) As-C、VI層土ブロック、VII層土ブロック少量。Hr-FA やや少量。砂質土。粘性弱、しまり中。(堆砂層)
- 18 灰黄褐色 (10YR4/2) VII層土ブロック多量。粘性やや弱、しまりやや強。(新段階再掘削時の残土層か)
 - 19 暗褐色 (10YR3/4) As-C、Hr-FA 少量。粘性弱、しまりやや弱。
 - 20 暗褐色 (10YR3/4) As-C 少量。Hr-FA ブロック微量。粘性弱、しまりやや弱。
 - 21 黒褐色 (5YR1/2) VI層土主体。As-C 微量。鉄分の溶脱により、まだらに赤化。粘性やや弱、しまり中。(壁崩落土)
 - 22 黒褐色 (5YR2/2) VI層土やや多量。As-C やや少量。粘性、しまりやや弱。(壁崩落土)
 - 23 黒褐色 (5YR1/2) VI層土主体。As-C 微量。鉄分の溶脱により、まだらに赤化。粘性やや弱、しまり中。(壁崩落土)
 - 24 におい黄褐色 (10YR5/3) VI層土ブロック、As-C 微量。黄褐色硬質砂 (総社砂層相当) やや多量。粘性、しまりやや弱。(壁崩落土)
 - 25 灰黄褐色 (10YR4/2) As-C 少量。Hr-FA ブロック多量。粘性、しまり弱。(壁崩落土)
 - 26 黒褐色 (5YR1/2) VI層土主体。As-C 微量。鉄分の溶脱により、まだらに赤化。粘性やや弱、しまり中。(壁崩落土)
 - 27 褐灰色 (5YR4/1) VII層土ブロック少量。やや砂質。(堆砂層)
 - 28 褐灰色 (5YR4/1) VII層土ブロック。IV層土ブロック、As-C 微量。砂質土。粘性弱、しまりやや強。(堆砂層)

※ 数字は底面直上の出土遺物を示す。

- 3号溝 B-B'**
- 1 暗褐色 (7.5YR3/4) As-C、Hr-FA 中量。粘性弱、しまり中。(窪地化後の堆積土)
 - 2 暗褐色 (7.5YR3/4) As-C やや多量。Hr-FA 中量。粘性弱、しまり中。(窪地底面の耕起層)
 - 3 黒褐色 (5YR3/4) As-C、Hr-FA ブロックやや少量、IV層土ブロックやや多量。粘性、しまり弱。(窪地底面の耕起層)
 - 4 におい黄褐色土 (10YR3/4) As-C 少量、Hr-FA やや多量。粘性、しまり弱。(窪地底面の耕起層)
 - 5 暗褐色 (10YR3/4) As-C 少量。Hr-FA やや多量。鉄分の溶脱により赤化。粘性やや弱、しまり中。
 - 6 黒褐色 (5YR1/2) VI層土多量、As-C 微量。粘性、しまり中。
 - 7 暗褐色 (10YR3/4) VI層土ブロックやや少量、As-C 少量。Hr-FA やや多量。粘性、しまりやや弱。
 - 8 暗褐色 (10YR3/4) As-C 微量、Hr-FA ブロック中量。Hr-FA やや多量。粘性、しまり弱。
 - 9 暗褐色 (10YR3/4) IV層土ブロック少量。Hr-FA やや少量。粘性、しまり弱。
 - 10 暗褐色 (10YR3/4) As-C やや少量。Hr-FA やや多量。やや砂質。粘性弱、しまりやや強。(堆砂層)
 - 11 黒褐色 (5YR1/2) VI層土ブロックやや多量。As-C 少量。Hr-FA ブロック微量。粘性、しまりやや弱。(壁崩落土)
 - 12 黄灰色 (2.5YR5/1) As-C、Hr-FA 少量。やや砂質。土師器細片を多く含む。粘性、しまりやや弱。
 - 13 灰黄褐色 (10YR4/2) As-C、Hr-FA、VI層土ブロック少量。砂質土。粘性弱、しまりやや強。(堆砂層)
 - 14 におい黄褐色 (10YR5/3) VI層土ブロック、As-C 微量。黄褐色硬質砂 (総社砂層相当) やや多量。粘性、しまりやや弱。(壁崩落土)
 - 15 黒褐色 (5YR1/2) As-C 微量。VI層土中量。やや砂質。粘性、しまり弱。
 - 16 黒褐色 (5YR1/2) VI層土ブロックやや多量。VII層土やや少量。やや砂質。粘性、しまりやや弱。
 - 17 褐灰色 (5YR4/1) As-C、VI層土ブロック、VII層土ブロック少量。Hr-FA やや少量。砂質土。粘性弱、しまり中。(堆砂層)
 - 18 暗褐色 (10YR3/4) As-C、Hr-FA 少量。粘性弱、しまりやや弱。
 - 19 黒褐色 (5YR1/2) VI層土ブロックやや多量。As-C 中量。粘性、しまり弱。
 - 20 暗褐色 (10YR3/4) As-C 少量。Hr-FA ブロック微量。粘性弱、しまりやや弱。
 - 21 黒褐色 (5YR1/2) VI層土ブロック中量。Hr-FA、As-C やや少量。粘性、しまり弱。
 - 22 暗褐色 (10YR3/4) VI層土少量。As-C 微量。粘性弱、しまりやや弱。
 - 23 黒褐色 (10YR1/2) VI層土主体。As-C 微量。鉄分の溶脱により、まだらに赤化。粘性やや弱、しまり中。(壁崩落土)
 - 24 におい黄褐色 (10YR5/3) VI層土ブロック、As-C 微量。VII層土やや多量。粘性、しまりやや弱。(壁崩落土)
 - 25 明黄褐色 (2.5YR7/6) VII層土ブロック多量。As-C 少量。粘性、しまりやや弱。(壁崩落土)
 - 26 黒褐色 (10YR2/2) VI層土主体。As-C 微量。粘性、しまり弱。(壁崩落土)
 - 27 褐灰色 (5YR4/1) VII層土ブロック、IV層土ブロック、As-C 微量。砂質土、粘性弱、しまりやや弱。(堆砂層)
 - 28 明黄褐色 (2.5YR7/6) VII層土ブロック多量。VI層土ブロックやや少量。粘性やや弱、しまりやや強。(旧段階掘削時の残土層か)

第6図 3号溝

に走向し、両端は調査区外。断面は逆台形形状。底面はほぼ平坦。覆土はHr-FAとAs-Cを含みAs-Bは含まない。
出土遺物 覆土中から土師器の甕が1片が出土したが、小片で時期不明のため図示しなかった。 時期 堆積状況から古墳時代後期～平安時代と考える。 備考 本跡を北東へ直線的に延長すると、一次調査1号溝へ繋が
り、これらは同一の溝と判断できる。1次調査1号溝の覆土中からは須恵器有蓋高坏の坏部片が出土しており、
坏部の形態は陶邑TK209型式に相当することから、6世紀末～7世紀初頭を若干前後する時期と判断できる。

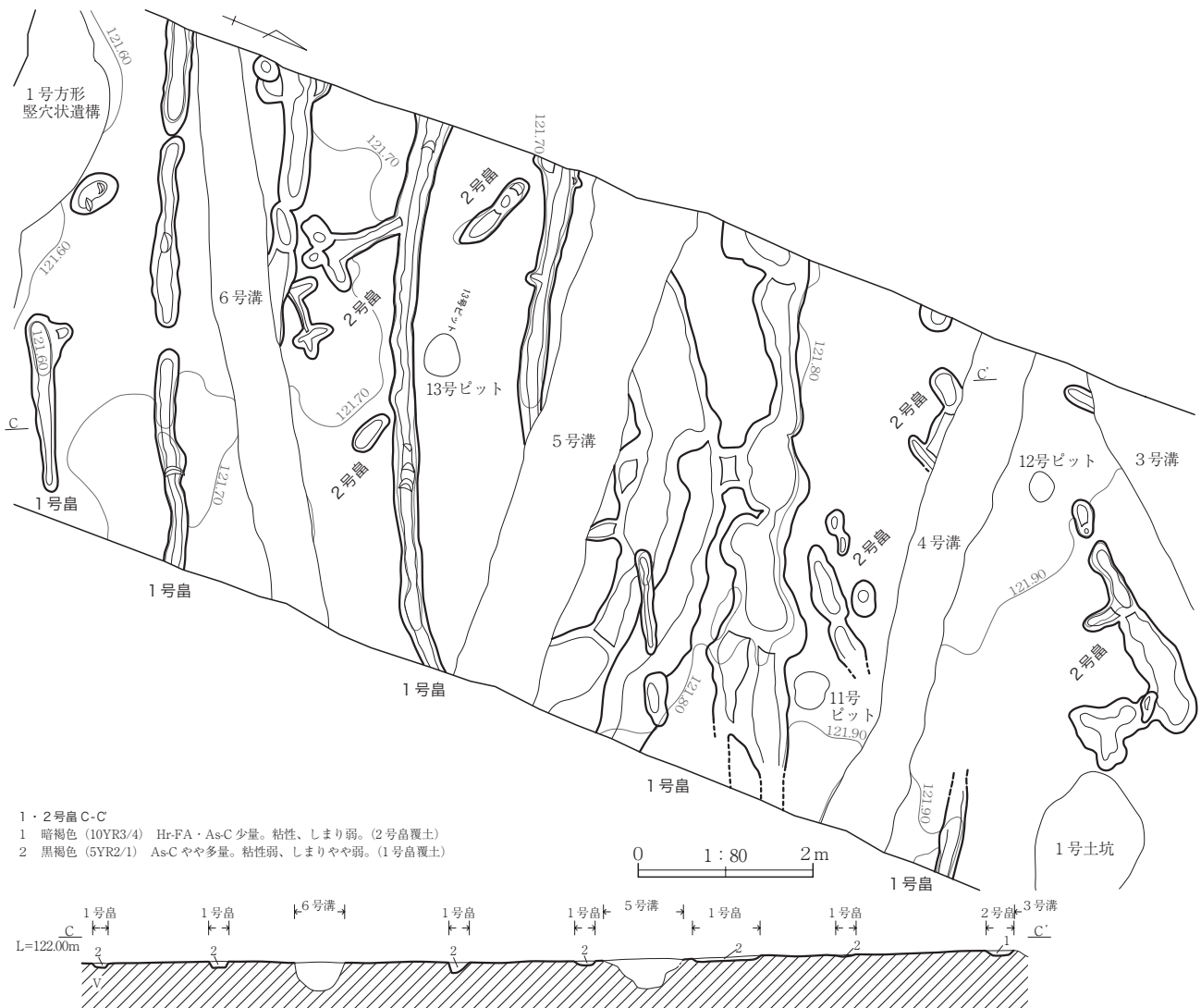
(2) 畝

1号畝 (第7・8・13図、PL. 3・4) 位置 調査区全域 (X = 42.053 ~ 42.080、Y = - 74.869 ~ - 74.880)。 重複 2・7号ピットより新しく、1～3・5・6号溝、2号畝、9号ピットより古い。6号ピットとの前後関係は不明。 主軸方位 N - 84° - E (調査区北部)、N - 68° - E (調査区南部)。 規模 畝間溝の間隔は、1.46～1.68 m、深さは0.24～0.26 m。 形状等 15条の浅い畝間溝が確認できる。畝幅は広く、畝間溝の断面は弧状。IV層土を畝間溝の覆土にもつ一定間隔で平行する小溝群を一括したが、調査区北部と南部では耕作方向が若干異なり、微地形的・身体感覚的な実情に則して耕作方向が無意識的に規制されていると判断できる。地点によっては東西の畝間溝にほぼ直交する、南北の畝間溝と判断できるわずかな張り出しが観察できる。3・4号溝の間では畝間溝が大きく乱れて浅い不整形の窪地状を呈しており、これは部分的な耕作頻度の高さに起因すると判断できる。 覆土 As-Cを多く含む黒色土でIV層土との分離は困難。Hr-FA・As-Bは含まない。 出土遺物 畝間溝の覆土中から土師器の壺・甕・壺の小片が少量出土した。1は畝間溝の底面から出土した。球胴甕の底部だが小片のため詳細は不明である。 時期 堆積状況と出土遺物から古墳時代前～中期と考える。 備考 畝間溝に同質の覆土をもつ畝は一次調査でも確認されている。1次調査の畝は、耕作方向こそ本跡に類似するが畝幅は狭く、東西と南北の畝替えの痕跡は明瞭であり、栽培植物か耕作方法・頻度もしくはその両方に差異があると推測できる。

2号畝 (第7・8図、PL. 3) 位置 調査区全域 (X = 42.053 ~ 42.080、Y = - 74.869 ~ - 74.880)。 重複 1号畝より新しく、1・3・4号溝より古い。 主軸方位 N - 44° - E。 規模 残存状態が悪く不明瞭だが、畝間溝の間隔は0.56～0.66 m、深さは0.06～0.08 m。 形状等 9～10条のごく浅い畝間溝が確認できる。畝幅は狭く、畝間溝の断面は弧状。北東から南西の畝間溝と、これにほぼ直交する北西から南東の畝間溝が、断続的だが格子状に観察でき、少なくとも2回以上の畝替えを推定できる。 覆土 Hr-FAとAs-Cを含み、As-Bは含まない。 出土遺物 畝間溝の覆土中から土師器の甕が少量出土したが、細片のため図示しなかった。 時期 堆積状況と重複関係から古墳時代後期と考える。

(3) 方形竪穴状遺構

1号方形竪穴状遺構 (第9図、PL. 3) 位置 調査区南端部 (X = 42.051 ~ 42.053、Y = - 74.872 ~ - 74.877)。 規模 竪穴部は東西2.26 m × 南北 [1.23] m、深さ0.97 m。テラス部を含めると東西 [5.16] m。 形状等 南部が調査区外のため詳細は不明だが、竪穴部の平面形は隅丸方形、断面形は箱状。VIII層を深く掘り込む。東西の上端は浅くテラス状に窪むが、底面に硬化面などは観察できなかつた。竪穴部の底面にも硬化面などは観察できなかつた。 覆土 17層以下の中～最下層はAs-Bを含まず、VI層土の粗いブロック主体の黒褐色土層と、VIII層土の粗いブロック主体の黄褐色土層が互層を成しており、埋戻しと判断できる。上層の1～12層はAs-Bを多く含み、埋戻し後の窪地に堆積した層群と判断できる。 出土遺物 上層から土師器の坏・甕、陶器の火鉢が少量出土したが、細片のため図示しなかった。 時期 堆積状況から平安時代後期と考える。 備考 中層以下の堆積や底面の状態から、掘削後短期間で埋め戻されたと判断でき、VIII層土の採掘を目的とした採掘坑の可能性はある。



1・2号畠 C-C
 1 暗褐色 (10YR3/4) Hr-FA・As-C少量。粘性、しまり弱。(2号畠覆土)
 2 黒褐色 (5YR2/1) As-C やや多量。粘性弱、しまりやや弱。(1号畠覆土)

第7図 1・2号畠 (調査区南部)

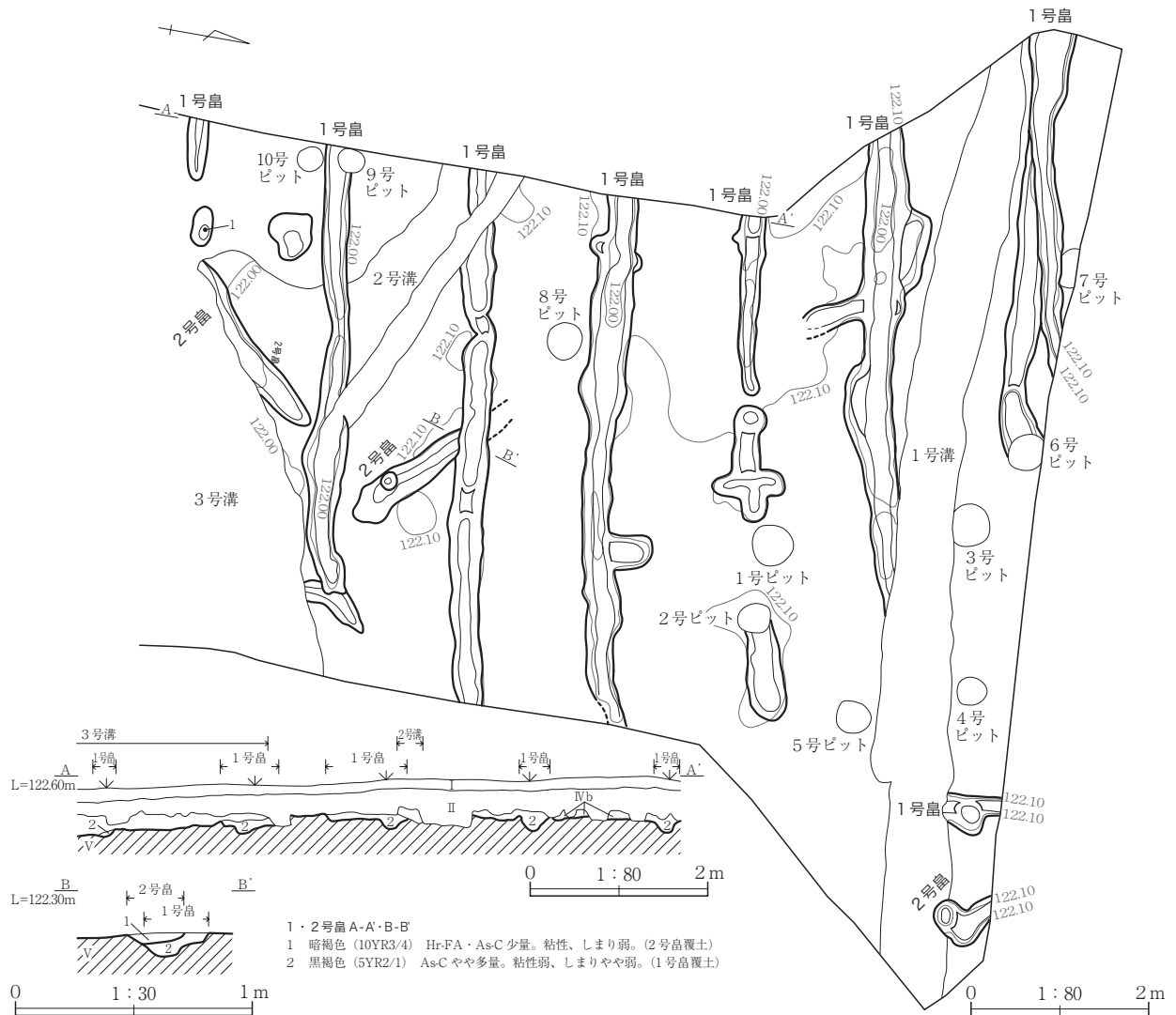
(4) 土坑

1号土坑 (第10図、PL. 3) 位置 調査区中央部 (X = 42.067、Y = - 74.872)。規模 東西 [1.75] m × 南北 1.18 m、深さ 0.74 m。形状等 平面形は不整楕円形、断面形は不整形。底面には不規則なピット状の小穴が6箇所観察できる。中央部の小穴が最も深く大きく、底面からの深さは0.56 mに達する。覆土 上層はAs-Cを多く含む黒色土でIV層土との分離は困難。中層以下は上層よりもAs-Cの混入量が少ない。Hr-FA・As-Bは含まない。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代前～中期と考える。備考 形状から、根株の直下に直線的な深根の主根をもつ、立ち枯れした樹木痕跡と判断できる。

(5) ピット (第11図、PL. 3・4)

1号ピット 位置 調査区北部 (X = 42.077、Y = - 74.873)。規模 東西 0.45 m × 南北 [0.47] m、深さ 0.08 m。形状 平面形は円形、断面形は浅い弧状。覆土 上層には柱痕状に直径2～8 mm前後の発泡の良い軽石が純層で観察でき、粒径や色調・発泡の程度からAs-Cと判断できる(1層)。ただし、下層にはAs-Cを少量含む黒色土の堆積が観察でき、層序に反転現象がみられる。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代前期と考える。備考 層序の反転から、As-Cの純層を掘り返した耕起の痕跡と判断できる。

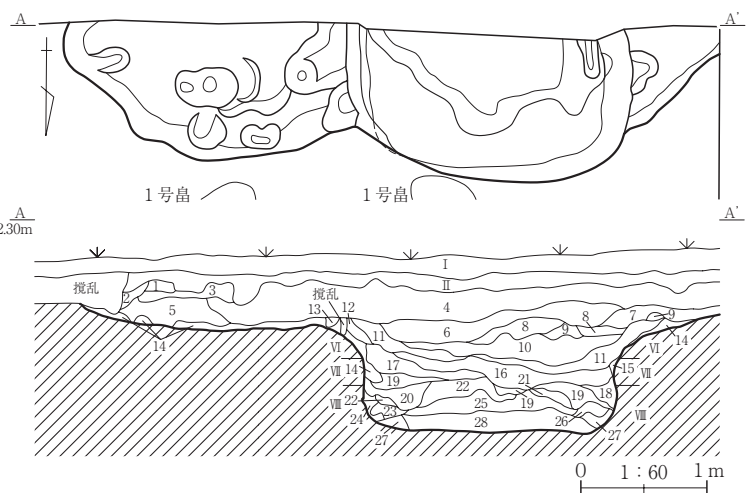
2号ピット 位置 調査区北部 (X = 42.077、Y = - 74.872)。規模 東西 0.29 m × 南北 0.36 m、深さ 0.10 m。形状 平面形は不整円形、断面形は浅い弧状。覆土 1号ピットと同様で、As-Cの純層とその混土層の層序に反転現象がみられる。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代前期と考える。備考 1号ピット



第8図 1・2号畠 (調査区北部)

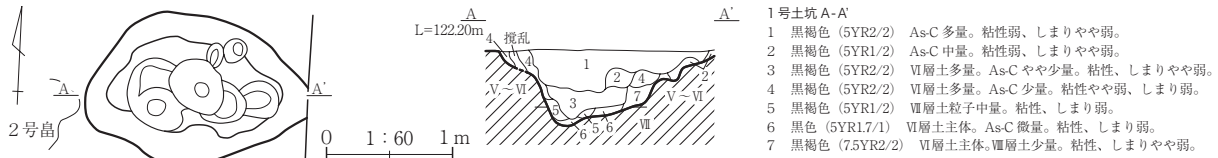
1号方形竪穴状遺構 A-A'

- 1 暗褐色 (10YR3/3) II層土主体。As-B 多量。粘性、しまり弱。
- 2 暗褐色 (10YR3/3) II層土主体。As-B 多量。VI層土ブロック少量。粘性、しまり弱。
- 3 暗褐色 (7.5YR3/3) As-B やや多量。As-C 微量。粘性、しまり弱。
- 4 暗褐色 (10YR3/3) As-B やや多量。VI層土、As-C 少量。粘性、しまり弱。
- 5 暗褐色 (10YR3/3) As-B やや多量。As-C 微量。粘性、しまり弱。
- 6 暗褐色 (7.5YR3/3) As-B 中量。As-C 少量。IV層土微量。粘性、しまり弱。
- 7 暗褐色 (7.5YR3/3) As-B やや多量。As-C 中量。VI層土少量。粘性、しまり弱。
- 8 暗褐色 (7.5YR3/3) As-B やや少量。As-C 少量。III層土中量。粘性弱、L=122.30m しまりやや弱。
- 9 黒褐色 (5YR2/2) VI層土ブロック主体。粘性、しまり弱。
- 10 黒褐色 (5YR2/1) VI層土多量。As-C 微量。粘性、しまりやや弱。
- 11 暗褐色 (10YR3/4) As-B 中量。As-C 微量。III層土多量。粘性、しまりやや弱。
- 12 黒褐色 (5YR2/1) As-B 中量。VII層土ブロック少量。VI層土やや多量。粘性、しまりやや弱。
- 13 黒褐色 (5YR2/2) IV層土ブロック主体。粘性、しまり弱。
- 14 黒褐色 (5YR2/1) V層土多量。As-C、Hr-FA 微量。粘性、しまり弱。
- 15 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) VII層土ブロック多量。VI層土中量。粘性、しまり弱。(壁崩落土)
- 16 黒褐色 (5YR2/1) As-B、VII層土ブロック少量。As-C 中量。粘性、しまりやや弱。
- 17 黒褐色 (5YR2/1) As-C、VII層土ブロック少量。VI層土多量。粘性、しまりやや弱。
- 18 暗褐色 (7.5YR3/3) As-C やや少量。VIII層土ブロック中量。粘性、しまり弱。(壁崩落土)
- 19 灰黄褐色 (10YR4/2) VII層土ブロック多量。As-C 少量。粘性、しまりやや弱。(埋戻し土)
- 20 黒褐色 (5YR2/2) VI層土ブロック中量。VII層土ブロックやや少量。As-C 微量。粘性、しまりやや弱。(埋戻し土)
- 21 黒褐色 (5YR2/1) As-C 微量。VI層土多量。粘性、しまりやや弱。



- 22 にぶい黄褐色 (10YR5/3) VII層土ブロックやや多量。As-C、VI層土少量。粘性、しまり弱。(埋戻し土)
- 23 にぶい黄褐色 (10YR5/3) VII層土ブロック多量。VI層土中量。粘性、しまり弱。(壁崩落土)
- 24 黒褐色 (5YR2/2) VI層土ブロック中量。VII層土ブロックやや少量。As-C 微量。粘性、しまりやや弱。(埋戻し土)
- 25 黒褐色 (5YR2/2) VI層土ブロック中量。VII層土ブロックやや少量。As-C 微量。粘性、しまりやや弱。(埋戻し土)
- 26 灰黄褐色 (10YR4/2) VII層土ブロック多量。As-C 少量。粘性、しまりやや弱。(埋戻し土)
- 27 黒褐色 (5YR2/2) VII層土ブロック中量。VI層土多量。粘性、しまりやや弱。
- 28 にぶい黄褐色 (10YR5/3) VII層土ブロックやや多量。As-C、VI層土少量。粘性、しまり弱。(埋戻し土)

第9図 1号方形竪穴状遺構



第10図 1号土坑

と同様に、As-Cの純層を掘り返した耕起の痕跡と判断できる。

3号ピット 位置 調査区北端部 (X = 42.079, Y = - 74.874)。重複 1号溝より古い。規模 東西0.47 m×南北 [0.43] m、深さ0.07 m。形状 平面形は円形、断面形は浅い弧状。覆土 1号ピットと同様で、As-Cの純層とその混土層の層序に反転現象がみられる。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代前期と考える。備考 1号ピットと同様に、As-Cの純層を掘り返した耕起の痕跡と判断できる。

4号ピット 位置 調査区北端部 (X = 42.079, Y = - 74.872)。規模 東西0.26 m×南北0.29 m、深さ0.14 m。形状 平面形は円形、断面形は逆台形状。覆土 As-Cを多く含む黒色土でIV層土との分離は困難。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代前～中期と考える。

5号ピット 位置 調査区北部 (X = 42.078, Y = - 74.872)。規模 東西0.36 m×南北0.36 m、深さ0.12 m。形状 平面形は円形、断面形はU字状で中段をもつ。覆土 1号ピットと同様で、As-Cの純層とその混土層の層序に反転現象がみられる。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代前期と考える。備考 1号ピットと同様に、As-Cの純層を掘り返した耕起の痕跡と判断できる。

6号ピット 位置 調査区北端部 (X = 42.079, Y = - 74.875)。重複 1号島より新しい。規模 東西0.39 m×南北0.46 m、深さ0.53 m。形状 平面形は円形、断面形は深いU字状。覆土 As-Cを多く含む暗褐色土。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代前～中期と考える。

7号ピット 位置 調査区北端部 (X = 42.079, Y = - 74.878)。重複 1号島より古い。規模 東西0.46 m×南北 [0.18] m、深さ0.25 m。形状 平面形は不明、断面形はU字状を呈する。覆土 As-Cの純層。調査区壁面の観察ではIV層を掘り込むことから、間接的だが1号ピット等と同様に、As-Cの純層とその混土層の層序に反転現象が生じていると判断できる。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代前期と考える。備考 1号ピットと同様に、As-Cの純層を掘り返した耕起の痕跡と判断できる。

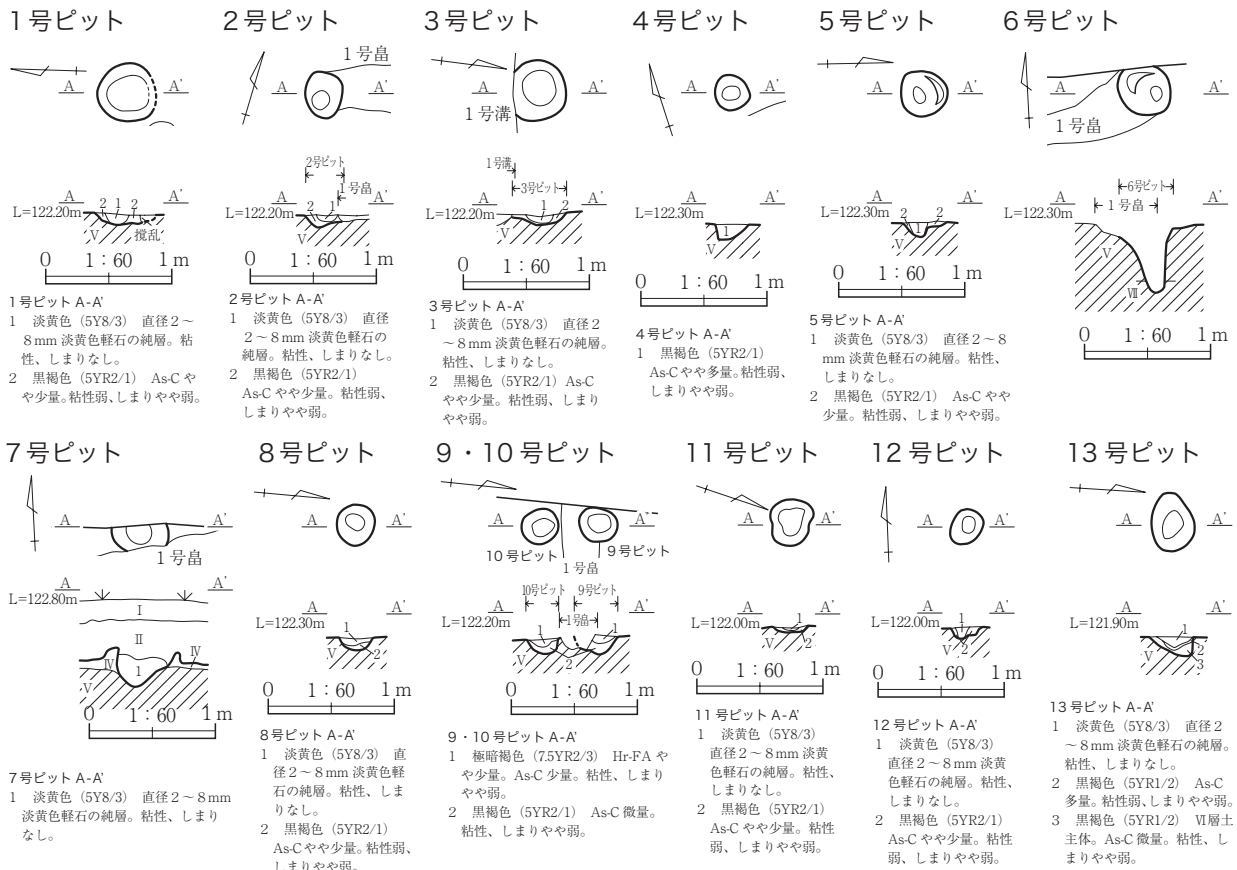
8号ピット 位置 調査区北部 (X = 42.074, Y = - 74.876)。規模 東西0.33 m×南北0.30 m、深さ0.10 m。形状 平面形は円形、断面形は弧状。覆土 1号ピットと同様で、As-Cの純層とその混土層の層序に反転現象がみられる。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代前期と考える。備考 1号ピットと同様に、As-Cの純層を掘り返した耕起の痕跡と判断できる。

9号ピット 位置 調査区中央部 (X = 42.072, Y = - 74.877)。重複 1号島より新しい。規模 東西0.26 m×南北0.31 m、深さ0.16 m。形状 平面形は円形、断面形は弧状。覆土 Hr-FAやAs-Cを含む。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代後期と考える。

10号ピット 位置 調査区中央部 (X = 42.072, Y = - 74.877)。規模 東西0.27 m×南北0.28 m、深さ0.13 m。形状 平面形は円形、断面形は弧状。覆土 Hr-FAやAs-Cを含む。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代後期と考える。

11号ピット 位置 調査区中央部 (X = 42.063, Y = - 74.873)。規模 東西0.37 m×南北0.33 m、深さ0.04 m。形状 平面形は不整楕円形、断面形は浅い弧状。覆土 1号ピットと同様で、As-Cの純層とその混土層の層序に反転現象がみられる。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代前期と考える。備考 1号ピットと同様に、As-Cの純層を掘り返した耕起の痕跡と判断できる。

12号ピット 位置 調査区中央部 (X = 42.064, Y = - 74.877)。規模 東西0.23 m×南北0.31 m、深さ



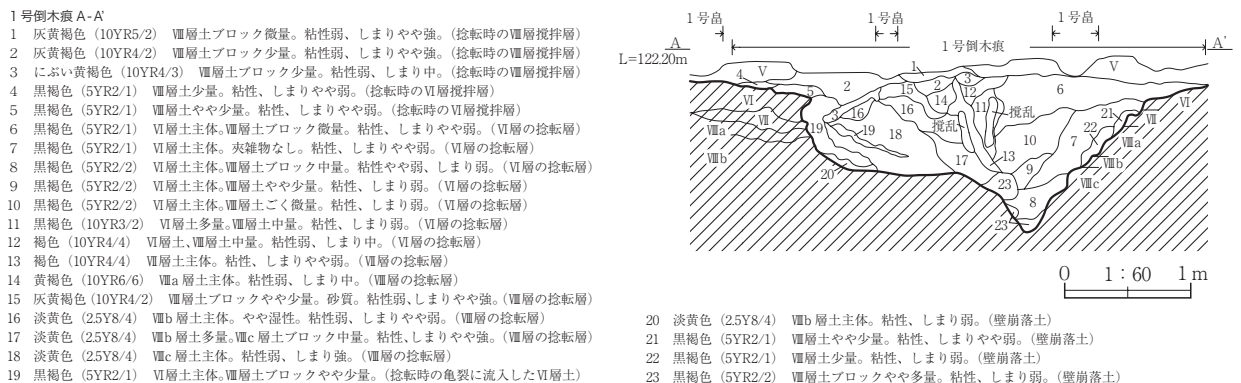
第11図 1~13号ピット

0.11 m。形状 平面形は楕円形、断面形は逆台形状。覆土 1号ピットと同様で、As-Cの純層とその混土層の層序に反転現象がみられる。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代前期と考える。備考 1号ピットと同様に、As-Cの純層を掘り返した耕起の痕跡と判断できる。

13号ピット 位置 調査区南部 (X = 42.057, Y = -74.875)。規模 東西0.46 m × 南北0.35 m、深さ0.15 m。形状 平面形は不整楕円形、断面形はV字状。覆土 1号ピットと同様で、As-Cの純層とその混土層の層序に反転現象がみられる。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代前期と考える。備考 1号ピットと同様に、As-Cの純層を掘り返した耕起の痕跡と判断できる。

(6) 倒木痕 (第4・12図)

倒木痕はV層上面の1号畝調査時に基本層序の乱れとして観察できたが、北トレンチのVI~VII層で2箇所の平面形を確認できた。いずれもVI層上面を構築面としV層はその上位に水平堆積する。1号倒木痕を試掘し、断面の観察を行ったところ、VI~VIII層に相当する捻転層が観察でき、V層の捻転は観察できなかった。捻転の方向が



第12図 1号倒木痕

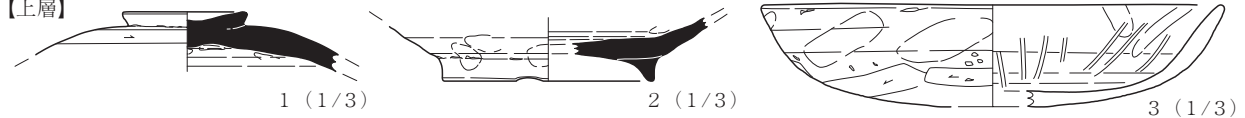
ら1号倒木痕は北に、2号倒木痕は北西に倒れたと判断できる。いずれも微地形の傾斜とは逆を向くことから、その要因に火山災害や洪水は推定し難い。構築面や捻転層の状況から縄文時代前期～弥生時代に形成されたと判断できるが、2号倒木痕は1号倒木痕の裾を切って形成されているので、若干の時間差が推定できる。

(7) 遺構外出土遺物 (第13図、PL. 4)

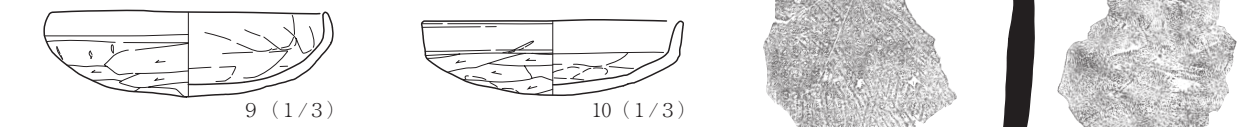
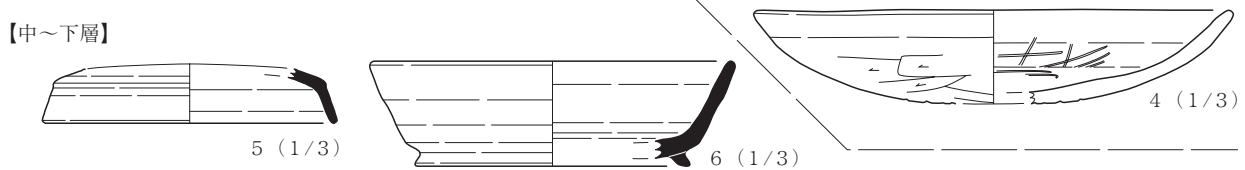
表土層から出土した1は集緒器で、煮繭した繭を繰糸機で集緒する際、糸が塊になるのを防止して撚りをかけるための部品である。2の石鏃は南トレンチのⅥ層上位から、3の打製石斧はⅤ層上面から出土した。その他、表土中から灰釉陶器皿1片や、調査地内で柱状脚部を有する高坏の脚部1片なども採集したが、細片や表面採集資料のため図示しなかった。

3号溝

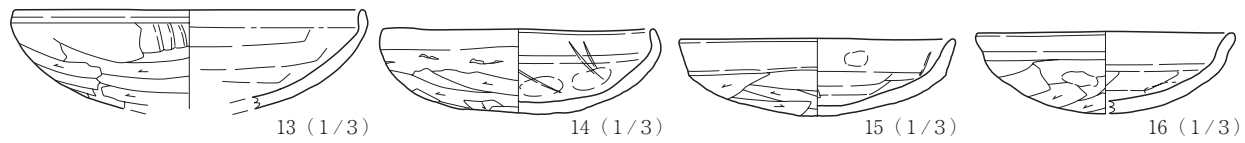
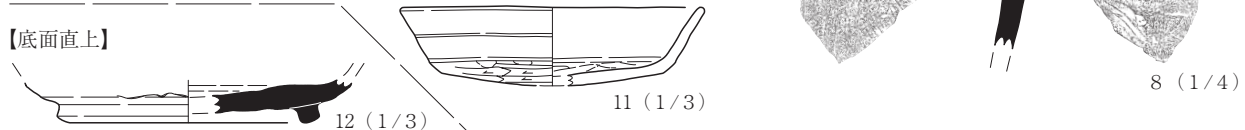
【上層】



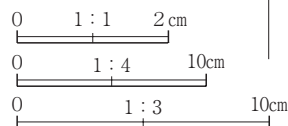
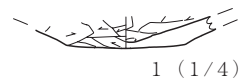
【中～下層】



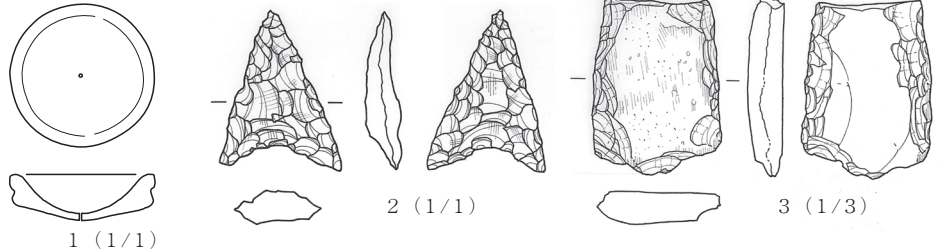
【底面直上】



1号畚



遺構外



第13図 出土遺物

第2表 出土遺物観察表

3号溝

番号	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・整形の特徴	残存状況・備考
1	3号溝 上層	須恵器 蓋	-	(筒み径) 4.8	[2.4]	長石、石英、 白色粒	堅緻	外面：暗赤灰色 内断面：灰赤色	外面：天井部回転ヘラケズリ後、摘み貼付。 内面：回転ナデ。	天井部 1/4。
2	3号溝 上層	須恵器 高台付坏 or 塊	-	(8.2)	[2.4]	黒色粒	やや 軟質	外内面：暗灰色 断面：灰白色	外面：回転ナデ後、摘み貼付。底部回転糸切り後 無調整。内面：回転ナデ。	底部 2/3。

3	3号溝 上層	土師器 環	(18.1)	-	[3.8]	角閃石、黒色 粒	軟質	橙色	外面：口縁部ヨコナデ。体部下半～底部ヘラケズリ。 内面：底部ユビナデ後、口縁～体部ヨコナ デ後、放射状暗文。	L/4。 在地産暗文環。
4	3号溝 上層	土師器 皿	(18.8)	-	[3.7]	黒・白色粒	やや 良好	にぶい褐色	外面：体～底部ヘラケズリ後、口縁部ヨコナデ。 内面：口縁～体部ヘラナデ、底部ユビナデ後、口 縁～体部放射状暗文・底部螺旋状暗文。	破片。
5	3号溝 覆土	須恵器 蓋	(11.4)	-	[2.1]	白色粒	堅緻	灰色	外面：回転ナデ。 内面：回転ナデ。	口縁部破片。
6	3号溝 下層	須恵器 高台付環	(14.1)	(10.7)	4.2	小礫、黒色粒	堅緻	灰色	外面：回転ナデ後、高台貼付。 内面：回転ナデ。	1/10。
7	3号溝 No.1	須恵器 盤	(27.6)	-	[4.1]	小礫、黒色粒	堅緻	褐灰色	外面：回転ヘラケズリ後、口縁・底部回転ナデ。 内面：回転ナデ後、縦位の部分的なヘラナデ。	1/5。
8	3号溝 No.3	須恵器 甕	-	-	[16.4]	チャート、小 礫、白色粒	堅緻	外内面：にぶい橙 色 断面：灰色	外面：平行タタキ後、ナデ。 内面：同心円当て具後、ユビナデ。	胴部破片。 外面にヘラ記号 「×」カ。
9	3号溝 No.7	土師器 環	10.8	-	3.3	角閃石、チャ ート	やや 良好	にぶい橙色	外面：口縁部ヨコナデ後、底部ヘラケズリ。 内面：ヘラナデ。	3/4。 北武蔵系環。
10	3号溝 No.4	土師器 環	10.2	-	3.0	角閃石、黒色 粒	軟質	橙色	外面：底部ヘラケズリ後、口縁部ヨコナデ。 内面：底部ヘラナデ後、口縁部ヨコナデ。	略定形。 蓋模倣環。
11	3号溝 覆土	土師器 環	(11.7)	-	[3.1]	角閃石、チャ ート	やや 良好	橙色	外面：口縁部ヨコナデ後、底部ヘラケズリ。 内面：口縁部ヨコナデ、底部ユビナデ。	1/5。 有段口縁環。
12	3号溝 No.23	須恵器 高台付環	-	(9.4)	[1.7]	長石、黒・白 色粒	良好	灰白色	外面：回転ナデ後、高台貼付後、底部ユビナデ。 内面：回転ナデ。	底部破片。
13	3号溝 No.21・22	土師器 環	(13.8)	-	[3.9]	角閃石	軟質	橙色	外面：口縁部ヨコナデ後、底部ヘラケズリ。 内面：ヘラナデ。	1/5。 北武蔵系環。
14	3号溝 No.8・10・15	土師器 環	10.7	-	[3.4]	角閃石、石英、 黒色粒	良好	橙色	外面：口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ。底部上 位無調整。 内面：底部ヘラナデ後、口縁部ヨコナデ。	略定形。 北武蔵系環。
15	3号溝 No.20	土師器 環	(10.7)	-	3.1	角閃石、石英、 チャート	軟質	橙色	外面：底部ヘラケズリ後、口縁部ヨコナデ。 内面：底部ヘラナデ後、口縁部ヨコナデ。	2/3。 蓋模倣環。
16	3号溝 No.6	土師器 環	(10.1)	-	3.2	角閃石、石英、 白色粒	軟質	橙色	外面：底部ヘラケズリ後、口縁部ヨコナデ。 内面：底部ヘラナデ後、口縁部ヨコナデ。	1/5。 蓋模倣環。

1号畠

番号	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・整形の特徴	残存状況・備考
1	1号畠 No.1	土師器 甕	-	-	[2.2]	輝石、長石、 赤・白色粒	良好	外面：黒褐色 内断面：明赤褐色	外面：ヘラケズリ。 内面：ヘラナデ。底部中央に強い指頭圧痕。	底部破片。

遺構外

番号	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・整形の特徴	残存状況・備考
1	表土	磁器 集緒器	1.9	-	0.6	夾雑物なし	堅緻	白色	型作り。中央に小孔。	完形。
番号	出土位置	種別、器種	長さ	幅	厚さ	石材	重さ	器形、成・整形の特徴		残存状況・備考
2	南トレンチ No.1	石器 凹基無茎鏃	2.1	1.6	0.5	黒曜石	0.9	左右側縁は連続的にやや粗い整形剥離を施し、左側縁は中央付近に括 れを有し、右側縁は若干の括れを有するが直線的に作出している。凹 基部の整形もやや粗く右脚部は太くやや長い。		完形。
3	確認面 (V層上面)	石器 打製石斧	7.1	5.2	1.4	安山岩	75.5	表面に広く自然面を残す横長剥片素材を、縦位に使用し、主に周縁加 工を施し石器を作出している。左右側縁には細かな調整剥離が認めら れるが、刃部の整形は粗く、使用による欠損剥離も推定できる。		基部欠損。 短冊形。

*数値の単位は cm。重さは g。

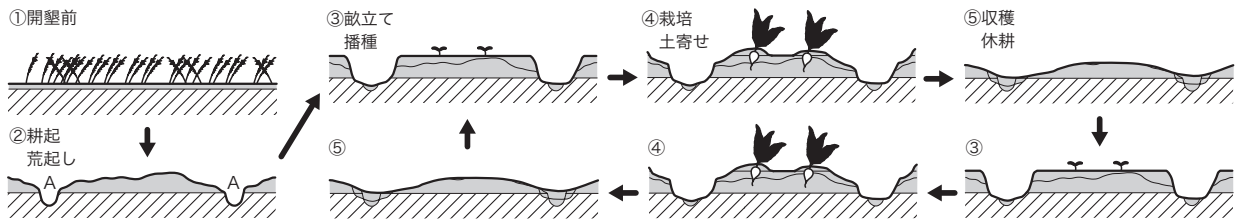
VI 発掘調査の成果と課題

今回の調査では、想定した古墳時代の竪穴住居跡はなく、調
査区一帯は該期の畠であった。また、畠の上層には飛鳥～平
安時代の用水路と判断できる溝跡が横断していた。文化庁が
“てびき”する報告書抄録の種別（文化庁文化財部記念物課
2010）では「田畑」に分類できるこのような遺跡は、「集落」
などに比べて見栄えは地味だが、一方で当時の一次的な生産活
動が最も端的に現れる遺跡ともいえる。また、一般的な調査条
件では確認すらままならない畠のような微細痕跡を、明確な遺
構として調査がかなうのは、「火山灰考古学」が成立する当地
の特性でもある。そこで本節では調査した畠と用水路を中心に
若干の検討を加え、調査の成果としたい。

第3表 周辺遺跡における畠の畝幅と
植物珪酸体比較（古墳時代）

遺跡名	遺構名	層位	畝間溝幅 (底面間・m)	植物珪酸体 (主要なもの)										
				イネ	キビ族 (ヘビエ属など)	オオムギ キ族	ムギ類?	ヨシ 属?	ウツギ 属(ツグクサ科)?	モロコシ 属?	タケ 類科?	アゼガ ヤ属?		
三ツ寺大F V	畠跡 (SX3)	Hr-FA 直下	15 ~ 45	○	○			○	○	○	○	○		
権現原 I	1号畠	Hr-FA 直下	50 ~ 60					○	○	○	○	○		
権現原 II	1号畠	Hr-FA 直下	70 ~ 150					○	○	○	○	○		
西浦北 II	1号畠	Hr-FA 直下	150 ~ 250	○				○	○	○	○	○		
諏訪西	5号畠	Hr-FA 直下	65 ~ 70	○				○	○	○	○	○		
諏訪西	6号新畠	Hr-FA 直下	120 ~ 130	○				○	○	○	○	○		
諏訪西	6号旧畠	Hr-FA 直下	120 ~ 150					○	○	○	○	○		
諏訪西	畠跡 (北)	Hr-FA 直下	50 ~ 70	○				○	○	○	○	○		
下芝天神	南畠	Hr-FA 直下	100	○	○			○	○	○	○	○		
下芝天神	南畠	Hr-FA 洪水層直下	100	○	○			○	○	○	○	○		
下芝天神	北畠	Hr-FA 直下	畝立なし	○	○			○	○	○	○	○		
下芝天神	北畠	Hr-FA 洪水層直下	60 ~ 120	○				○	○	○	○	○		
金古安良田	A区1面旧畠	Hr-FA 直下	100 ~ 120	○				○	○	○	○	○		
庚申	1号畠	Hr-FA 直下	100	○				○	○	○	○	○		
寺屋敷 I	2号畠	Hr-FA 直下	120 ~ 140	○				○	○	○	○	○		
寺屋敷 I	6号畠	As-C 直下	120 ~ 160	○				○	○	○	○	○		
西国分 II	1号畠	Hr-FA 直下	100 ~ 130	○				○	○	○	○	○		
西国分 II	3号畠	Hr-FA 直下	100 ~ 140	○				○	○	○	○	○		

*○多量 ○少量 網かけは畝間が幅広の一群を示す。



■は As-C を含む耕作土と理論上の細分層だが、現象としては細分不可能な“C 黒”の単一層をなす。□は黒ボク土で、この直上が本遺跡の確認面となる。Hr-FA などテ
フラの降下に見舞われた場合は、いずれかの段階の太線 (表面) の状態で埋没し、確認される。耕作のサイクルは基本的に②によって形成された耕作土の範囲内で行われ、③～⑤を
繰り返す。本跡は②の段階に行われた A が残存する状態を示し、ゆえに確認された畝間溝は規則的に平行し、一回性を示すものと推測できる。地力低下などにより技術的な荒起し
が再度必要な場合は②に戻り、その場合は一次調査の畠のように軸の異なる A が重複するだろう。※図中の栽培種は任意。

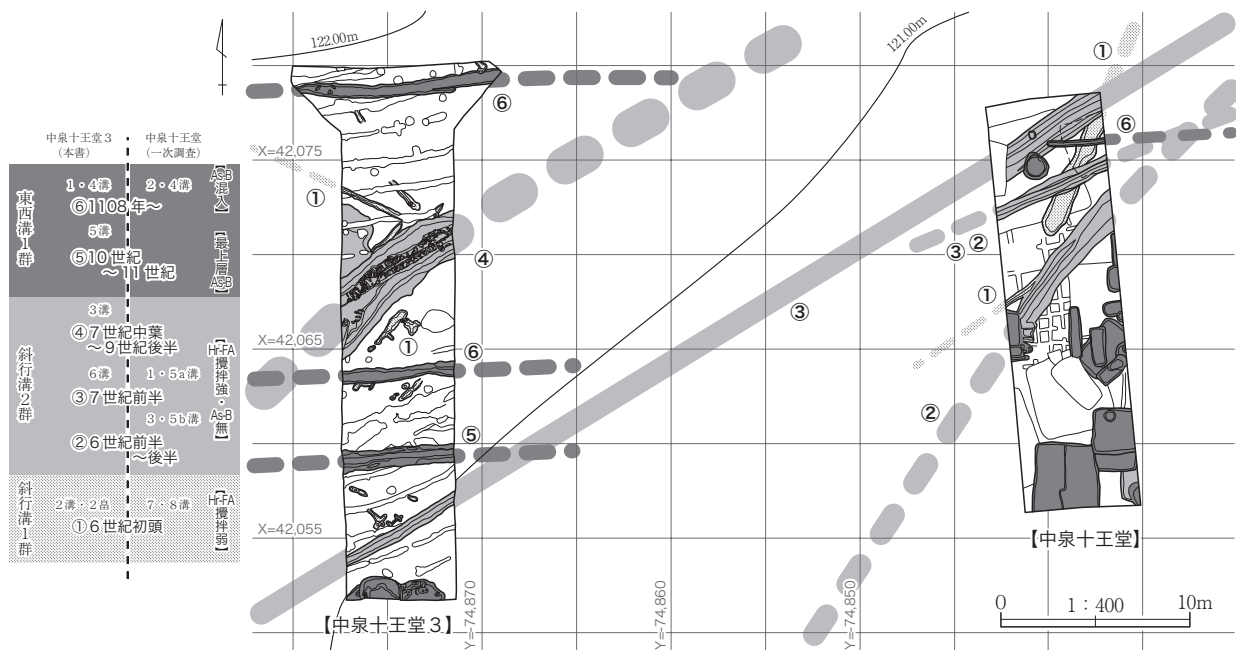
第14図 1号畠の残存状態

樹木 1号土坑は形態から樹木痕跡と判断した。覆土は1号畠と同時性を示し、耕作地の中には木が立っていたか切株があったのだろう。樹木痕跡から樹種を判断するのは難しいが、根の張り方(根系)の図鑑(苧住1979)を頼りにできるだけ考えてみる。15図に示したように、土坑状の落込みの底部からピット状の小穴が複数分岐して中央の小穴が最も深くなるのは、おそらく根株の直下に明瞭な主根が伸び、なおかつ根株周囲の浅い深度に側根や細根が密生して明瞭な根鉢を形成する根系だろうと推定した。このような根系に分類される植物にはコナラ属・クリ属・トチノキ属などがあり、参照した中ではBに示したコナラの標本がよく類似する。そこで、出土木製品の樹種データベース分析を参照してみると、北関東における該期の建築部材はクヌギ節やコナラ節が主体を占めるようであり(高橋2012)、植生としては整合性が確認できる。

畠の日当りを考えると本跡を切株と仮定する方が都合は良く、その場合伐採された主幹は建築部材として利用されたのかもしれないが、もはや検討の方法がない。ちなみに話をひとつ戻すと、『常陸国風土記久慈郡条』は「椎」を山の珍味のひとつとしているし(関根1969)、県内では古墳時代のトチやコナラ属の種実も8例程度が確認されており(洞口2008)、「どんぐり」のような堅果類の食物利用も十分に想定できるのである。

2 古代の用水路

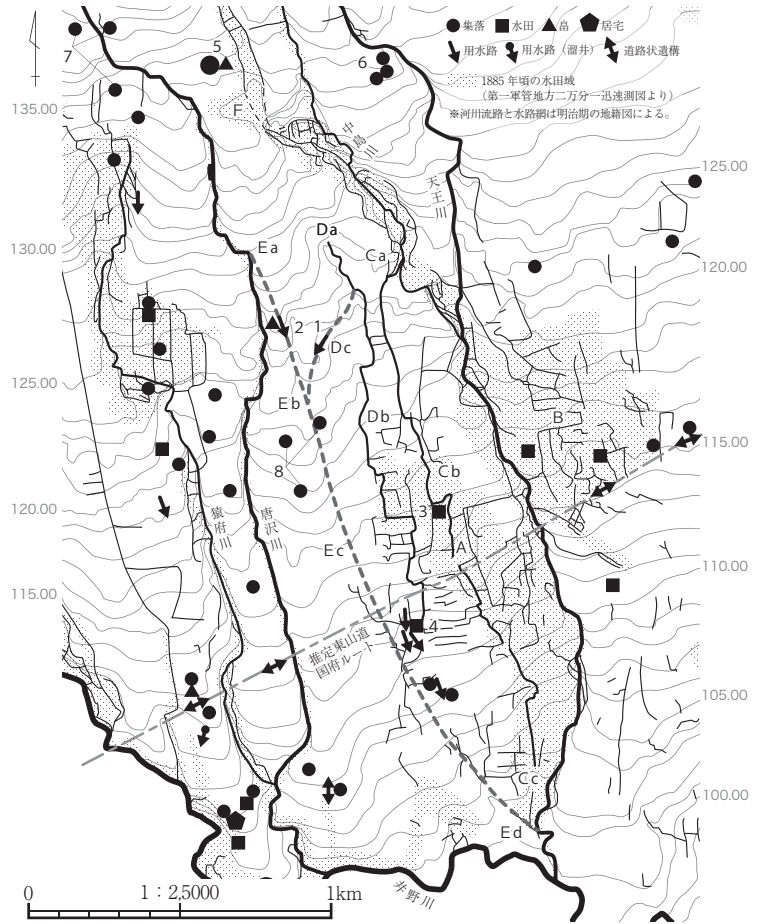
水源と流末 3号溝は7世紀中葉～9世紀後半の用水路と判断でき、調査地を北東から南西に流れる。17図には流路を想定するため、該期の遺跡分布に市街化以前の用水路網と微地形を重ねた。これを見ると、小地域の東を流れる天王川や中島川が主に灌漑するのは、より東のBである。本跡(1)の南にあるAは、中島川から分水するCと、その西の窪地から発するDの系統で灌漑される。Daは現在、3面コンクリートの用水路で、F以南の微高地にある住宅地の排水路を兼ねるが、よく見ると晴天続きで住宅地の排水路が枯れた日もDa以南は水が流れ、水路幅も広い。記録はないが地形的な条件も加味すると、Daは付近に多い扇端部湧水点の一つと判断できる。その位置関係から本跡は、Daを微地形の傾斜に平行して南西へ迂回させた用水路(Dc)と推測できる。本跡の流勢はさほど強くなかったと判断できるが、これは湧水を水源として地形に平行させたためだろう。この点、本跡はさほど有用な用水路とは考えにくい。一方、2の三ツ寺村前道下遺跡では、北西から南東へ流れる大規模な用水路(2号溝)が調査され、Ea付近で唐沢川から取水した可能性が指摘される(権田2016)。その推定E系統はEb付近で本跡と合流する位置関係にあり、本跡はこの推定E系統を補完する用水路といえる。4の福島遺跡では、As-B直下の水田と水路網が調査され、E系統はこの辺りも灌漑するが、1885年頃の水田域はFに三ツ寺堤が築堤された後なのに250mほど東へ後退する。この点と微地形の傾斜からは、微高地の裾を通る



第16図 Hr-FA降下後における溝の変遷

Ecの流路が推定できる。

溝の変遷 16図には、本遺跡と一次調査の溝の接続関係と変遷を示した。3号溝と同じ方向性の遺構は、Hr-FA直後の①の畠や溝にみえ、この火山災害が本遺跡の微地形や土地利用に何らかの制約を課したことがわかる。その後、6世紀後半～7世紀前半に、用途は推断できないが溝が流れ、7世紀中葉にその脈絡の中で本跡の用水路④が開削される。つまり本跡がこの地点に開削される背景には、少なくとも前段階での地形特性の認知という必然があったと推測できる。本跡は9世紀後半に機能を失うが、17図2の用水路もAs-Bを待たずに、数度の洪水で埋没する。推定E系統の取水水源である唐沢川の上流では、17図7の保渡田東遺跡などで、7世紀後半～10世紀前半の度重なる洪水により各時期の住居跡が埋没しており、このような災害を通じて17図の推定E系統は機能を失い、これを補完した本跡も廃絶したのであろう。その



第17図 3号溝の流路想定

廃絶で水田域は後退を余儀なくされるが、その後D系統はいつの頃からか、より低所を流れるDa - Dbの系統に変遷し、17図Aの水田域を再形成したと推測できる。ちなみに本跡の廃絶後、本遺跡の溝跡は東西軸へ変化するが、その画期は16図⑤の5号溝の堆積にみるようにAs-Bの降下以前で、中世以降現在まで続く地割りの萌芽は、少なくとも本遺跡周辺ではAs-Bの災害を直接の契機としないことは一考を要するだろう。

集落との関係 本遺跡の南には、西側の微高地に権現原遺跡などの集落があり(17図8)、東側の低地には既述したDa - Dcと推定E系統が灌漑する水田域がある。一方、北側の高所に分布する堤上遺跡などは、Ⅲ章-2に記したようにHr-FA直後の6世紀前半から営まれる拠点的な集落で(17図5・6)、7世紀にはさらに高所に足門村西古墳群などの群集墳をもつ。未だ分布の空白と議論の余地は多いが、これらの遺跡群を動的に分析することで、河川争奪と自然災害の狭間でできた狭隘な小地域を舞台に、およそ南北の地形傾斜に規制された垂直指向の情景を描きつつ進んだ、古代におけるある程度自律的な小地域形成の姿が見えるのかもしれない。

註
1) 杉山真二氏は、イネの植物珪酸体(機動細胞由来)が資料1g当たり5,000個以上の密度で検出された場合に、稲作が行われた可能性が高いと判断しており(杉山2000)、群馬県域ではこれまでの水田調査データの集積から3,000個程度を目安としている場合が多い。寺屋敷1遺跡6号畠の検出量は4,600個である。
2) 「a-2種は黒井峯遺跡B区5号畑が典型例である(中略)。畝幅は平均1.2mで、平坦な作付け面は数条植えと考えられる。」(能登1991P90L2~5)「c種は(中略)黒井峯遺跡B区36号畑が典型例で、およそ3.6m×0.8mの短冊状の作付け面を並列させて構成する特殊な形態の畑である。(中略)プラント・オーバー分析などによって稲の陸(畑)苗代であることが判明している」(同P92L9~15)

引用・参考文献
 河住雄 1979『樹木根系図説』誠文堂新光社
 群馬県史編纂委員会 2001『群馬県史 通史編 上』原始古代 中世・近世
 群馬県史編纂委員会 2002『群馬県史 通史編 下』近代現代
 権田友寿 2016『Ⅵまとめ』『三ツ寺村前道下遺跡』高崎市教育委員会
 杉山真二 2000『植物珪酸体(プラント・オーバー)』『考古学と植物』同成社
 鈴木徳雄 1998『古代北武蔵における灌漑と土地利用-埼玉県児玉郡の考古学的事例を中心に-』『治水・利水遺跡を考える-人は水とどのようにつきあってきたか-』第7回東日本埋蔵文化財研究会 東日本埋蔵文化財研究会・山梨県考古学協会
 関根貞隆 1969『奈良朝食生活の研究』吉川弘文館
 早田勉 1990『第五節 前橋台地と広瀬川低地帯』『群馬県史 通史編1』原始古代1 群馬県史編さん委員会
 高橋敦 2012『13章 北関東・甲信-茨城県・栃木県・群馬県・山梨県・長野県-』『木の考古学 出土木製品用材データベース』海青社
 田村孝 2018『火山灰に埋没した水田跡・畠跡の調査-榛名山東麓を中心に-』『考古学ジャーナル 特集 火山灰に埋もれた古墳時代』No.712 ニューサイエンス社
 能登雄 1990『三ツ寺I遺跡の成立とその背景-5世紀代における河川移動を伴う水田耕地の拡大について-』『古代文化』第42巻第2号 古代学協会
 能登雄 1991『畑作農耕』『古墳時代の研究』4 生産と流通I 雄山閣
 日沖剛史 2016『Ⅵまとめ』『中皇十王堂遺跡』高崎市教育委員会
 文化庁文化財部記念物課 2010『発掘調査のてびき-整理・報告書編-』同成社
 河口正史 2008『群馬県種実類調査遺跡集』『研究紀要』26 群馬県埋蔵文化財調査事業団
 若狭徹 2007『古墳時代の水利社会研究』学生社

※ 紙数の都合上、Ⅲ・Ⅵ章で用いた主要な文献以外は制愛した。



調査区全景 奥に榛名山（南東から）



調査区全景（北から）



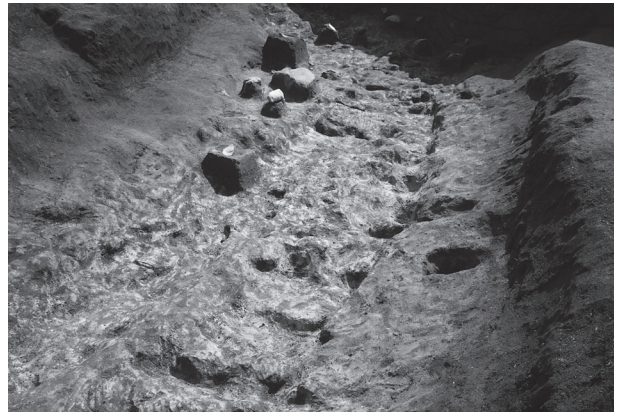
1号溝 完掘状況（東から）



2号溝 完掘状況（南東から）



3号溝 完掘状況（北東から）



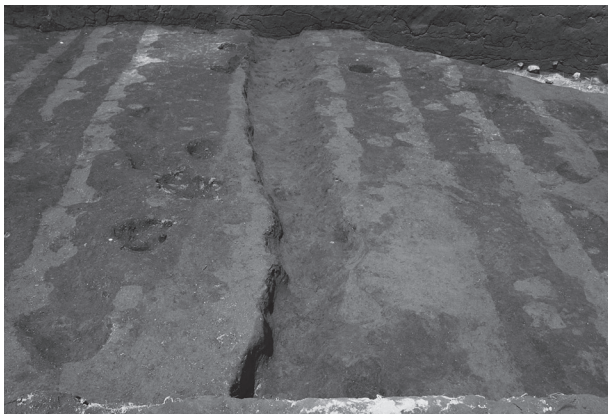
3号溝掘削痕 完掘状況（北東から）



3号溝 土師器坏（12図9）出土状況（北東から）



3号溝 土師器坏（12図15）出土状況（北東から）



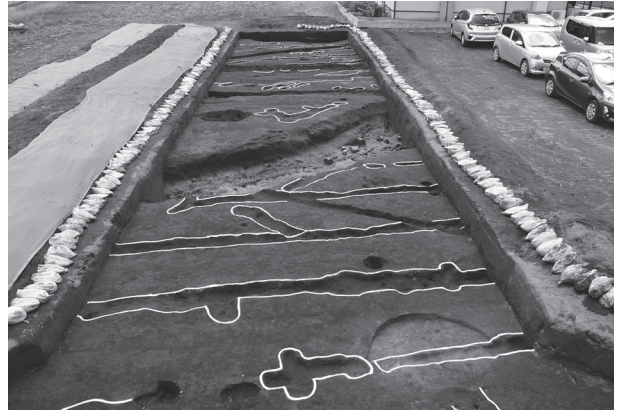
4号溝 完掘状況（東から）



5号溝 完掘状況（東から）



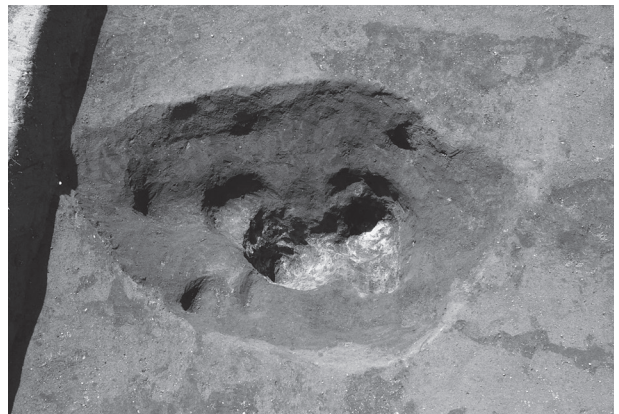
6号溝 完掘状況 (北東から)



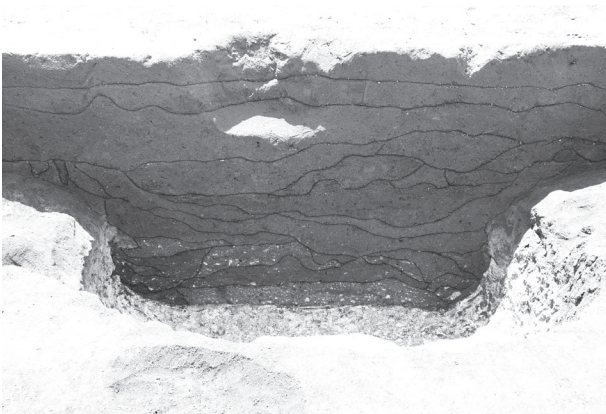
1・2号畠 完掘状況 (北から)



1・2号畠 完掘状況 (北西から)



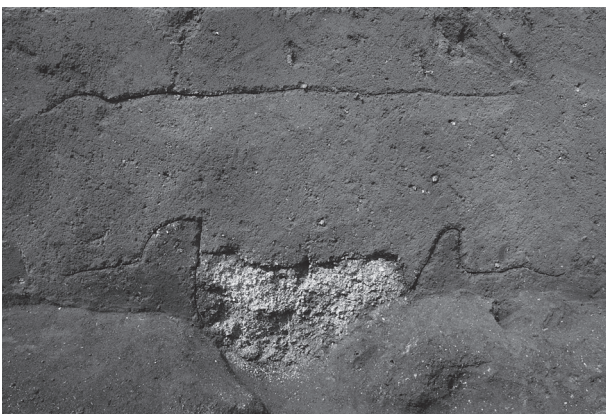
1号土坑 完掘状況 (北から)



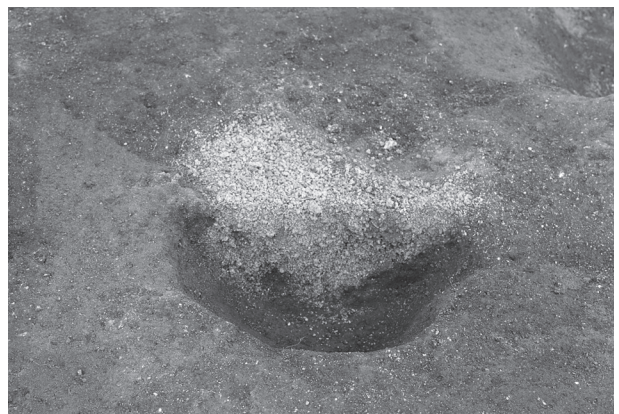
1号方形竖穴状遺構 土層断面 (北から)



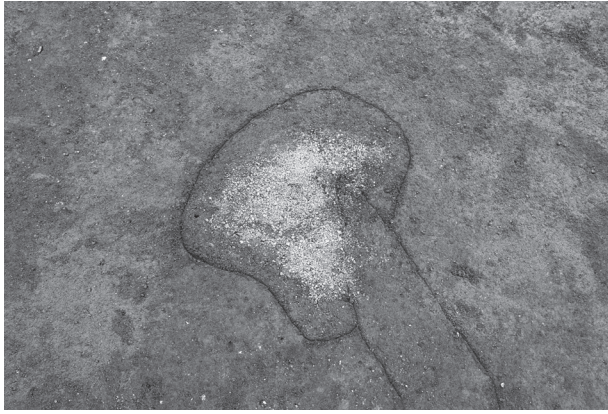
1号方形竖穴状遺構 完掘状況 (北西から)



7号ピット 土層断面 (南から)



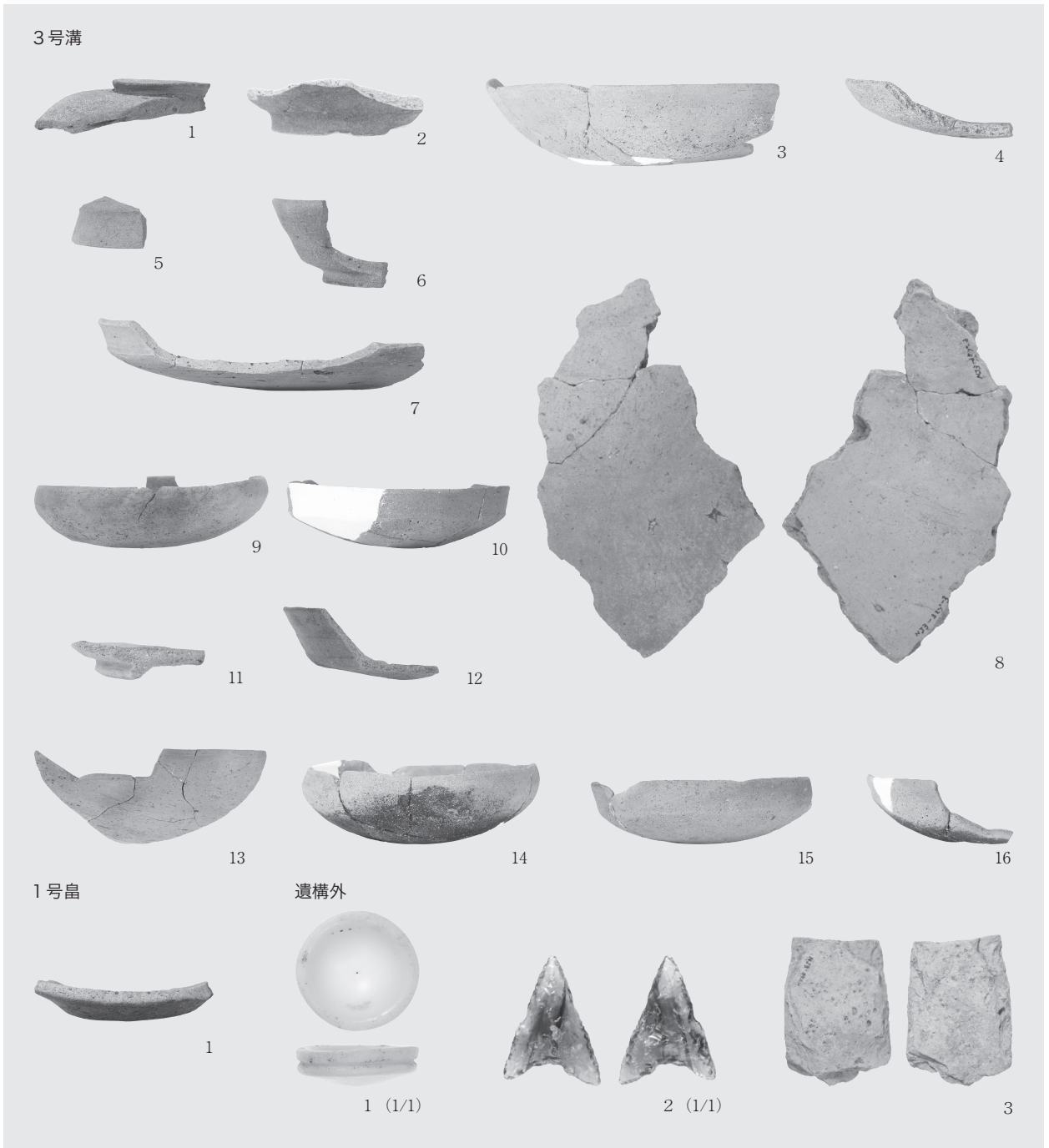
8号ピット 土層断面 (東から)



13号ピット 検出状況 (東から)



発掘調査風景 (北東から)



出土遺物

報告書抄録

フリガナ	ナカイズミジュウオウドウイセキ
書名	中泉十王堂遺跡3
副書名	宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	-
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第418集
編著者名	中村岳彦
編集機関	技研コンサル株式会社
編集機関所在地	〒371-0031 群馬県前橋市下小出町1-15-3
発行機関	高崎市教育委員会
発行機関所在地	〒370-8501 群馬県高崎市高松町35-1
発行年月日	2018年8月30日

フリガナ	フリガナ	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経			
ナカイズミジュウオウドウイセキ 中泉十王堂遺跡3	グンマケンタカサキシナカイズミマナ 群馬県高崎市中泉町 アサジュウオウドウ 字十王堂99-1	102020	742	36°22' 23"	139°0' 8"	20180418 { 20180522	182.95㎡	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中泉十王堂遺跡3	田畑	縄文時代	倒木痕 2箇所	縄文土器 打製石斧・石鏃	
		古墳時代	畠溝 2面 土坑 1基 ピット 13基	土師器	・As-C混入黒色土を畝間溝の覆土に含む広畝の畠。
		飛鳥～ 平安時代	溝 1条	須恵器 土師器	・3号溝は用水路と判断できる。
		平安時代	溝 1条 方形壜穴状遺構 1基	須恵器 土師器	
		中世以降	溝 2条	陶磁器 古銭	

中泉十王堂遺跡3

宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2018年8月13日 印刷

2018年8月30日 発行

発行

高崎市教育委員会

〒370-8501 群馬県高崎市高松町35-1

TEL 027-321-1292

編集

技研コンサル株式会社

印刷

朝日印刷工業株式会社

